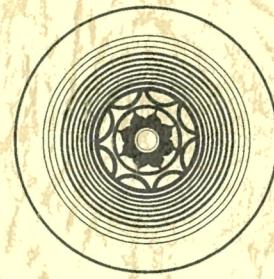


糸島市立

伊都国歴史博物館

紀要

第7号



糸島の幕末～勤皇の志士「大神壱岐守」の史料を中心に～

.....江野道和(1)

糸島のト占神事2～淀川の百々手祭り～

.....古川秀幸(9)

上原勇夫氏採集資料～今山遺跡採集の石器類～

.....江野道和(19)

2012

序

伊都国歴史博物館では伊都国王墓「平原遺跡」出土の《国宝》を中心に糸島地域の歴史遺産を常設展示していますが、本年度（平成23年度）の事業として、秋季特別展「『邪馬台国』を支えた国々——今使譯所通三十國——」を含む4回の企画展示を主体に歴史講座（名誉館長講座・館長講話・伊都学講座ほか）・体験講座・フィールドワークなどの多彩な催しを行い、市民の皆さまはもとより県内外の幅広い皆さまにご利用いただきました。

また、考古資料や仏像・古文書などの寄贈・寄託を受けて収蔵品の充実を図ることができ、今後の博物館活動に大いに活用させていただけるものと考えております。

さて、本紀要は当館学芸活動の一環として企画展に関連して調査・検討を行った成果のほか、博物館に寄贈された資料や民俗文化に関する報告をさせていただきます。

『糸島の幕末～勤皇の志士「大神壱岐守」の史料を中心に～』では、平成22年度冬季企画展『糸島幕末維新伝』の開催に際して調査・研究した近世資料を紹介しています。

『糸島のト占神事2～淀川の百々手祭り～』では正月行事である「百々手祭り」にみられる年占神事の事例を紹介しています。

また、『上原勇夫氏採集資料～今山遺跡採集の石器類～』では博物館に寄贈された石器類の研究成果を報告しています。

本紀要をご高覧・ご活用いただく皆さまには、忌憚のないご叱正をはじめ、多岐に亘るご指導・ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、本紀要の作成にあたりまして資料のご提供やご協力をいただきました関係各位に深くお礼申し上げます。

平成24年3月31日

糸島市立伊都国歴史博物館

館長 榊 原 英 夫

目 次

糸島の幕末～勤皇の志士「大神壱岐守」の史料を中心に～

江野道和..... 1

糸島のト占神事2 ～淀川の百々手祭り～

古川秀幸..... 9

上原勇夫氏採集資料 ～今山遺跡採集の石器類～

江野道和..... 19

糸島の幕末

～勤皇の志士「大神壱岐守」の史料を中心に～

江野 道和（伊都国歴史博物館）

I はじめに

伊都国歴史博物館では平成22年度の冬季企画展として『糸島幕末維新伝』を開催した。会期は平成23年2月26日～4月3日である。幕末における糸島を紹介する展示会で、糸島に関連する維新の志士と唐津街道の宿場町である「前原宿」を取り上げた。維新の志士としては、慶応元（1865）年のいわゆる乙丑の獄に連座し、姫島に流された野村望東尼をはじめ、望東尼救出に尽力したといわれる釣本久平長邦、本稿で取り上げる前原の老松神社（写真1、地図中①）神職である大神壱岐守の紹介を行った。また、前原宿のコーナーでは、幕末に閑番を務めた萩尾可朔や萩尾定蔵にまつわる史料の紹介を中心に、当時の唐津街道絵図などの展示もあわせて行った。

さて、ここで紹介する大神壱岐守繁興については、糸島出身の幕末の志士であるにも関わらず、あまり地元でも知られていない状況である。これは、後で詳しく述べるが、明治維新後に建てられた繁興を顕彰する銅像などが現在は失われていることなどが大きな要因として挙げられる。については、繁興の紹介を大神家に残されている文書や写真に沿って見て行きたい。



写真1 現在の老松神社（幕末の頃は、ここから300mほど北西に行った場所にあった）

II 大神壱岐守繁興略伝

まず、繁興の略歴について、大神家文書の中にある『大神壱岐守繁興略傳』（表2-3）と『大神壱岐守繁興事蹟書』（表2-9）を元に見て行きたい。

1) 生い立ち

大神壱岐守繁興は幼名を堰といい、家を継いだ後、壱岐守と称した。天保5（1834）年3月21日、筑前国志摩郡師吉村（現、福岡県糸島市志摩師吉）で生まれた。大神家は代々、前原宿の老松神社や師吉村日吉神社の祠官を務めた家柄であった。父は和泉正友、母は中村まさである。上記略伝には

「少シテ書ヲ読み和歌ニ通シ殊ニ筆翰ヲ能クス
夙ニ心ヲ皇典ニ寄セ兼テ武芸ヲモ綜べ童蒙ヲ訓誨
ス」

と記されており、子どものころから文武いずれも非常に優秀であったといわれる。

15歳の時に父の職を継いで神官となり、老松神社に奉仕することとなった。

2) 攘夷決行

繁興は、久留米水天宮祠官で久留米藩士の真木和泉保臣や福岡藩士の平野二郎国臣らと呼応して、尊王攘夷の思いを抱いていた。文久3（1863）年、京都に上り、「従五位下」に叙せられ、「肥前守」を賜った。

この年の5月10日、攘夷が決行され、長州藩は馬關海峡を封鎖、米仏蘭艦船に対して砲撃を加える事件が起こる。この事件に接した繁興は、攘夷決行を促すため急いで福岡へ帰藩した。福岡において繁興は、福岡藩士で尊王攘夷派の河合茂山勝文の家に身を寄せ、野村望東尼の庵で密会し、藩政の沈滯に憤りを覚え、改革を促すよう仕向かた。しかし、佐幕派に阻まれ、やむなく非常手段に訴えることとなり、元治元（1864）年3月24日、

牧市内の暗殺と中村圓太の脱獄に加担した。この決行にあたり、筑紫衛等と肥前田代（現、佐賀県鳥栖市）の志士に連絡して、下手人および圓太一行の潜匿地を用意するなどの計画を立て、決行後は自ら、圓太一行を護衛して無事に田代姫方村の志士、梁井直衛宅へ送り届けた。

3) 福岡藩を脱藩、長州へ

繁興は、一行を送り届けた後も独り、田代近傍に隠れて、福岡捕吏の動静を伺っていたが、転じて豊前に入り、廣田耕作と名を変え、再び転じて、久留米藩に出て、若津港から長崎行きの船に乗った。この船中において、偶然圓太一行と遭遇し、一緒に長崎へ行き、長州藩聞役の小田村文助（後の楫取素彦男爵）と会った。文助の尽力により、長崎から快船に乗って、同年3月28日、馬関に入った。同地において桂氏（小五郎か）に会い、直ちに三田尻へ行き、忠勇隊に編入された。この時、三輪松之助と名を変えている。

4) 禁門の変に参加

繁興は同年6月、長州藩先発軍に所属し、忠勇隊の隊長真木和泉に従い上洛した。繁興らは禁門の変にあたり、天王山の麓に駐屯していたが、数日経った同年7月19日の明け方、幕府軍の急襲にあった。真木和泉は同士16名と共に死を決し、繁興も共に死のうとしたが、真木和泉は

「我ハ負傷シテ起ツコト能ハサルヲ知ル 喬等ハ宜ク此場ヲ落延 後図ヲナセ」

と言い、子の菊四郎（又の名を弦）と弟の直人（又の名を外記）を託し、長州藩へ落とした。繁興らは、真木らと決別し、落ちる途中、英彦山の同士と遭遇し、共に兵庫から船を出して三田尻に到着し、三条卿の守衛に復帰した。

それから間もなく、幕府は征長の軍を起こしたため、大神繁興は筑前の同士と共に、忠勇隊に加わり、周防の高森（現、山口県岩国市）に駐陣した。

4) 福岡帰藩、刑死

第一次長州征伐後、繁興は福岡藩の藩論が攘夷側に回復したと聞き、同年10月10日、堀六郎義則、

斎田要七尚義らと共に帰藩した。福岡にて、藩士の月形洗藏と計り、藩論を尊王攘夷へ傾け、筑長連合実現に向けて策を巡らせた。しかし、藩論は佐幕に一変し、連合案は水泡に帰した。大神繁興は、脱藩の罪で2人の同士と共に摘発され、入獄し、同年10月18日に小呂島へ流刑となった。

その配所に着いた時、詠んだ句

「みそら行く月の光はかわらねど
薄雲かかる時もあるかな」

「秋ふかみよわる虫の音聞くさへも
おもひぞまさる國の行末」

翌、慶応元（1865）年になるといわゆる乙丑の獄が起こり、福岡藩の攘夷派志士は大弾圧を受けることとなる。繁興は、この年の6月、小呂島から福岡の獄へ送られ、同年10月23日に斬罪に処せられた。

繁興が口吟した辞世の句

「碎けてもいとわざらめや君のため
こころつくしの玉と散るとも」

享年32歳、前原村に葬られた。

5) 維新後

明治維新後、招魂社に祀られ、後に靖国神社に合祀された。

明治2年3月吊祭料として、銀子を下賜された。
その全文

「
前原宿神職
大神上総繁正 事
御詮議ヲ以父壱岐守ト申者
為吊料銀子十両被下候事
巳三月
」

「同三年祭資料永世下賜
大神繁正
亡父壱岐守累年勤皇之志厚方向を完國ニ
心力を盡といへとも不幸宿志を不遂之段
不便之至ニ候依之以格別為吊料永世銀七
枚宛下賜候御沙汰候事

六月 藩政応 」

また、明治35（1901）年、天皇が熊本へ御臨幸の際に、位を授かつた。

「贈正五位
宮内大臣從二位勲一等子爵田中光顕宣
明治三十五年十一月八日
故 大神壱岐」

1) 口宣案

文久3年、繁興が京都に上り、從五位下肥前守を賜った時に下された文書と伝わる。（写真2）

「上卿新大納言

文久三年三月廿八日 宣旨
從五位下大神繁興
宣任肥前守
藏人權右中弁兼右衛門權佐藤原博房奉」

包紙（写真2－右）には

「口宣案 二」

と書かれ、菊と桐の御紋が入った漆塗りの箱に納められている（写真3）。

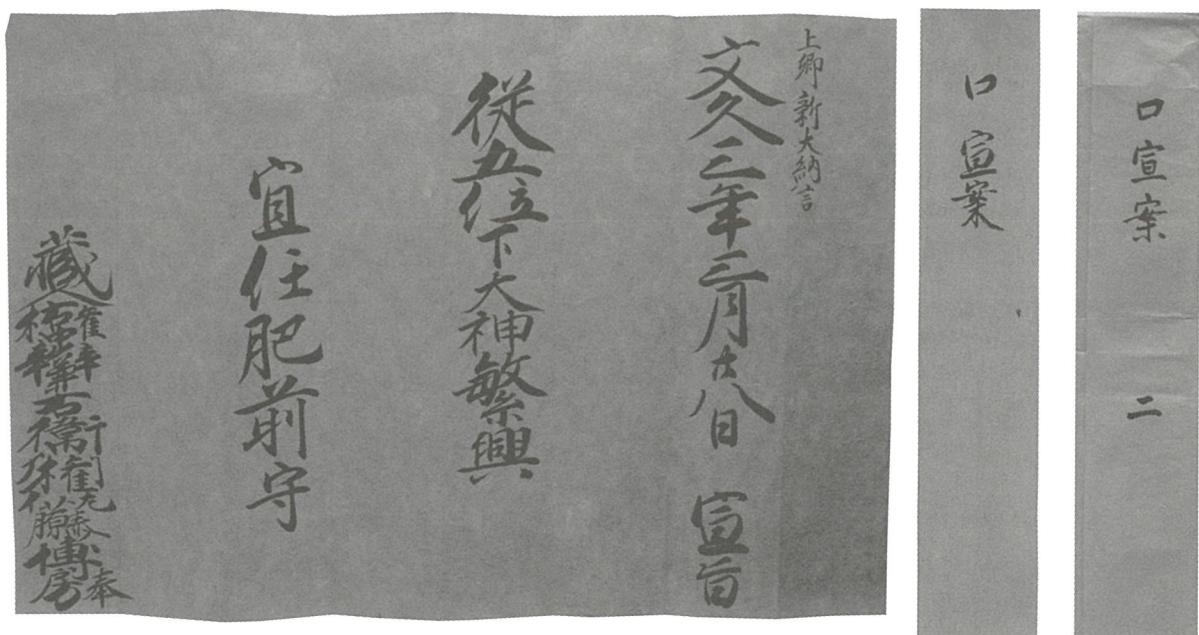


写真2 口宣案（左・中）、包紙（右）



写真3 口宣案外箱



写真4 大神壱岐守銅像 (絵はがき)

2) 大神壱岐守銅像

現在、糸島市の笹山公園になっている場所に、繁興を顕彰する銅像が建てられていたと伝わる。写真4は、銅像の絵はがきで、写真の下に「贈正五位大神壱岐守銅像 (たかの写)」とある。

繁興の子孫である大神正徳氏によれば、この銅像は、太平洋戦争時の金属回収令により供出され、失われたそうである。

現在は台座を含めすべての遺構が失われているため、その詳しい場所はわからなくなっている。しかし、絵はがきの写真から、笹山公園山頂の忠靈塔下の広場南西側であった可能性が高い（第1図の地図中②の場所）。また、正確な大きさもわからないが、写真から台座の高さ3m程度、銅像およそ1m50～60cm（繁興の身長に合せたのか？）合せて4.5mくらいであったと考えられる。

3) 丸田の碑

繁興の墓が、丸田（糸島市役所東側、第1図の地図中③）の墓地にあったようだ。この碑表には次のように書かれていたとされる（大神文書7）。

「大神壱岐守茂（ママ） 興墓

裏銘

茂（ママ） 興性直実而頗勤

王為国事勞其身數歲茲

慶應紀元乙丑年十月二十有三日

就刑死享年三十二門人等感其

偉債築墳墓以表之矣

明治二年巳七月二十日

」

現在墓は、公園等の整備により失われている。

IV おわりに

以上、繁興の生涯を簡単ではあるが見てきた。繁興の勤皇志士としての活動は、文久3年～元治元年にかけての僅か2年間に凝縮されている（関連年表）。特に後半期の元治元年には、暗殺と脱獄の補助→脱藩→長州藩へ亡命→禁門の変→長州藩へ落ちる→福岡帰藩→投獄・流罪と非常に目ま

ぐるしい活動を行っており、この行動距離はわかっているだけでも2000kmにもおよぶ（第2図）

この繁興を突き動かした直接の契機となったのは、文久3年の京都上洛であったと考えられる。同年には、京都に長州、土佐をはじめ各藩の志士が集まり、尊王攘夷に向けて活動を繰り広げていた。この地において、繁興も他藩の志士に混じり、激論を交わしたであろうことは想像に難くない。この経験が、後の1年半におよぶ彼の活動のエネルギーとなったといえる。

福岡藩の西端に位置する宿場町「前原宿」。この地方の小さな町も幕末の動乱と無関係ではなかった。本文中にも述べたとおり、繁興に関する史跡や遺構は残念ながら、今は失われてしまっている。しかし、日本の将来を憂い、真剣に行動をし

た先人がいたことを忘れてはならない。

＜謝辞＞

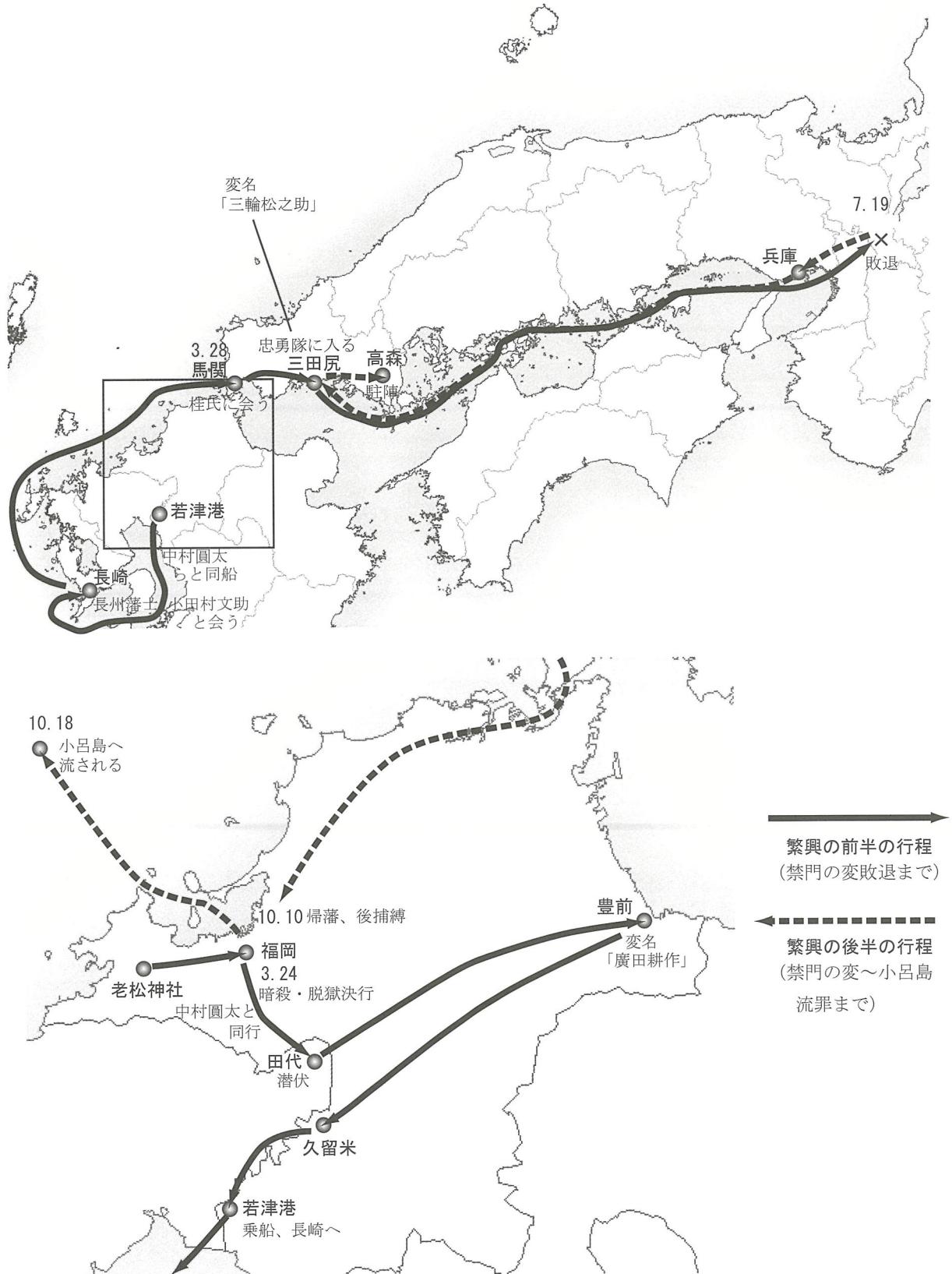
企画展の開催にあたって、大神壱岐守繁興に関連する史料については、大神正徳氏にご提供をいただいた。また、幕末の糸島に関連する出来事や人物については、有田和樹氏に助言並びに貴重な情報をいただいた。ご協力いただいたお二人に深く感謝申し上げたい。

（参考文献）

牛島賢治『福岡県前原町誌（復刻版）』（文献出版、1975年）
有田和樹『唐津街道前原宿研究所』（ブログ
<http://karatsukaido.jugem.jp>）
新修志摩町史編集委員会編『新修志摩町史』（志摩町、2009年）



第1図 大神壱岐守関連地図



第2図 元治元年における大神壱岐守の活動図

表1 大神壱岐守繁興 年譜

西暦	年号	年齢	大神壱岐守繁興に関するできごと	国内の主なできごと
1834	天保5	1	・3.21 誕生。幼名を堰と称す	
1848	嘉永元	15	・大神家を継いで老松神社神職に。壱岐守と称す。	
1862	文久2	29		
1863	文久3	30	・京都に上り、「従五位下肥前守」を賜る ・京都から福岡に帰り、藩論を尊王攘夷に傾けるよう運動する	・4.23 寺田屋事件 ・8.21 生麦事件 ・12.12 イギリス公使館焼き討ち
1864	元治元	31	・3.24 同士と共に、福岡藩家老の牧市内暗殺と中村圓太の脱獄を決行する ・脱藩し、肥前田代に潜伏。豊前、久留米を経て長崎へ。豊前で「廣田耕作」と変名 ・3.28 馬関に入る ・三田尻へ行き、忠勇隊に入る。この時、「三輪松之助」と変名 ・7.19 天王山で幕府軍の急襲にあう ・兵庫から船に乗り、三田尻へ逃れる ・忠勇隊に加わり、周防高森に駐陣 ・10.10 同士とともに福岡へ帰藩 ・10.18 小呂島に流罪	・5.10 長州藩、馬關海峡においてアメリカ商船砲撃。(以降、フランス軍艦・オランダ軍艦も砲撃) ・8.18 八月十八日の政変。尊王攘夷派の公卿が宮中から一掃される → 七卿落ち ・9.21 土佐勤王党弾圧。武市半平太らが投獄される
1865	慶応元	32	・6 小呂島から福岡の獄へ送られる	・6.5 池田屋事件 ・7.19 禁門の変。長州藩兵、幕府方に敗れる ・7.20 平野国臣刑死 ・7.24 第一次長州征伐(長州藩征討の勅命) ・8.5~6 四国連合艦隊、下関の砲台を占拠 ・10.21 長州藩、騎兵隊など諸隊に解散するよう諭告 ・11 高杉晋作、野村望東尼の平尾山荘に匿われる
1866	慶応2		・10.23 刑死	・3.15 長州藩、諸隊を再編成 ・閏5.11 武市半平太ら刑死 ・10 福岡藩で尊王攘夷派の弾圧事件「乙丑の獄」が始まる
1867	慶応3			・11.15 野村望東尼が姫島に流される ・1.21 薩長同盟 ・9.16 野村望東尼、姫島から救出される ・10.24 慶喜將軍職辞任 ・11.6 野村望東尼病没(62歳) ・12.9 大政復古の大号令
1868	明治元		・3 子の繁正に吊祭料として銀子が下賜される	・9.8 明治と改元
1869	明治2		・7.20 繁興の墓が丸田の墓地に建てられる	
1901	明治35		・11.8 正五位が贈られる	

表2 大神文書一覧

史料番号	史料名	製作年	差出(記録者)	宛所	形態	点数	内容	備考
1	口宣案二	文久三年三月一八日 十一月廿六日	上卿新大納言 大神壹岐守	大神繁興 爻上様	一紙	1	従五位下大神繁興 1宣正肥前守	函入り
2	〔書簡〕	明治三十五年	大神繁正	冊子	1			函入り
3	大神壹岐守繁興略伝	明治二十四年	前原村長高市東吾	大神繁正	一紙	1		函入り
4	口上	明治二十六年			墨紙	1		函入り
5	婧國神社合祀	明治二十七年六月			冊子	1	赤穂精義内侍所、落葉物語、薩摩風上記	函入り
6	牢の塵	明治二年七月二十日			墨紙	1	壹岐守繁興墓 (大神)	函入り
7	丸田ノ碑表	明治七年六月			写真焼き付け	7	大神壹岐守銅像写真 (笛山)	函入り
8	銅像写真	—			墨紙	1	大神繁正書 『後年訂正シテ出ス』	「大神家歷代」封筒入
9	大神壹岐守繁興事蹟書				墨紙	1		「大神家歷代」封筒入
10	大神家略系譜	明治二十年十月十二日			墨紙	1		「大神家歷代」封筒入
11	大神家略系譜				墨紙	1		「大神家歷代」封筒入
12	大神家略系譜				墨紙	1		「大神家歷代」封筒入
13	大神家略系譜・改名願	大正四年十一月			墨紙	1	大神豊吉→糸島郡長山口良助へ改名願。系図は改名願に添付したもの	「大神家歷代」封筒入
14	大神氏歷代關天簿	天保六年十一月廿四日			墨紙	1		「大神家歷代」封筒入
15	大神氏伝記				一紙	1		「大神家歷代」封筒入
16	覧書?				一紙	1		「大神家歷代」封筒入
17	詩				冊子	1	生涯無定地運命在皇天	「自書」封筒入
18	和歌				卷子	1		「自書」封筒入
19	和歌				卷子	1		「自書」封筒入
20	和歌				卷子	1		「自書」封筒入
21	序跋集				冊子	1	杉邇屋藏	「自書」封筒入
22	牢中隨筆				冊子	1	鳩巢逸話 他	「自書」封筒入
23	口上之覧				冊子	1		「自書」封筒入
24	大神壹岐守門人名簿				堅帳	1		「自書」封筒入
25	門人帳	安政元年正月ヨリ			堅帳	1		「自書」封筒入
26	覧書?				一紙	1		「自書」封筒入
27	画帳				冊子	1	植物の絵	「自書」封筒入
28	手紙				一紙	1	桜井大宮司→大神	「自書」封筒入
29	鎮魂祭式				冊子	1		「自書」封筒入
30	十種神宝行事次第	大神壹岐大三輪茂興、			冊子	1		「自書」封筒入
31	神道次第				折帳	1		「自書」封筒入
32	串料				一紙	1	大神壹岐守永串料	「自書」封筒入
33	一向宗一枚起請文ほか、				冊子	1		「自書」封筒入
34	皇國 古学古道太意 全	平田門人 竹内孫市			冊子	1		「自書」封筒入
35	真宗安心帖				横帳	1		「自書」封筒入
36	占帳	天保十五年三月	大神壇 也		小冊子	1		「自書」封筒入
37	杉能舎 筆 二巻				冊子	1	松平越中守達白ほか、	「自書」封筒入
38	錦裳智術全書				横帳	1		「自書」封筒入
39	表題なし				冊子	1		「自書」封筒入
40	その他				横帳の残欠	1		「自書」封筒入

糸島のト占神事2

～淀川の百々手祭り～

古川 秀幸（伊都国歴史博物館）

I はじめに

糸島市二丈淀川地区では毎年、1月25日（今は25日に近い日曜日）に百々手（モモテ）祭りと呼ばれる稻の豊不作を占う的射神事が行われている。元来、百々手（モモテ）とは、弓術において甲乙2人を1組として100回に分けて200手を射ることを指すものであるが、弓矢によって魔性を鎮める宮儀式がその元と考えられ、今日でも歩射儀式として全国各地の神社において行われている。しかしながら、淀川地区では的射の後に直会として「大飯食らい」という奇祭が付随しており、民間信仰の色合いが強い特徴を持っている。

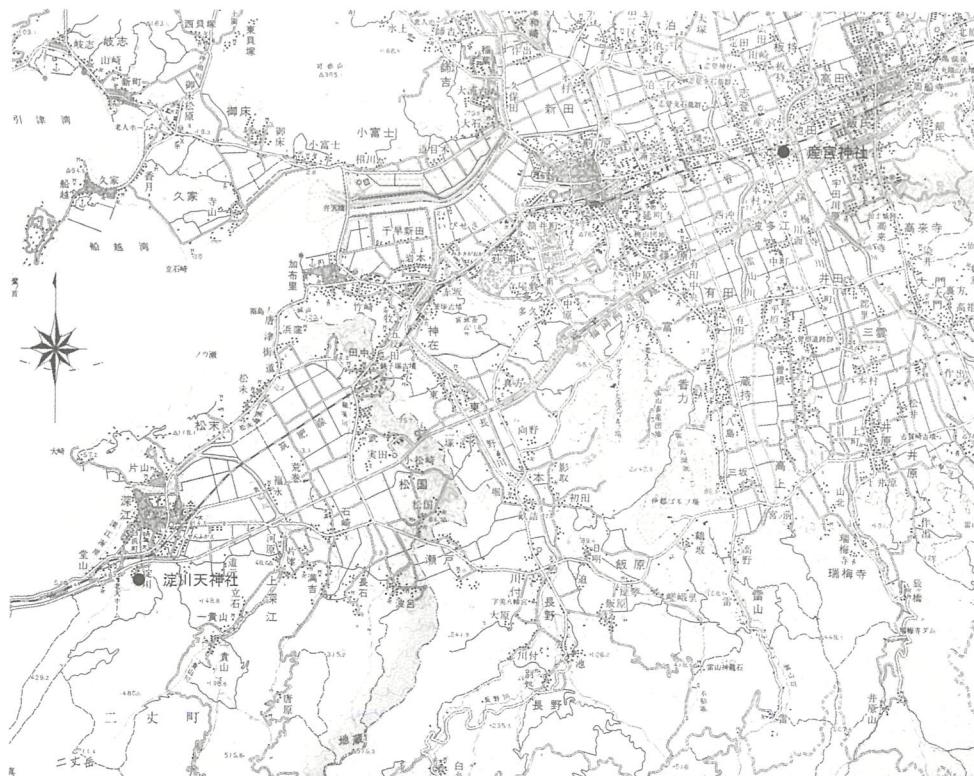
同祭りの研究、解釈については、調査にご同行頂いた白川琢磨氏の優れた論考があり、詳細はお譲りしたいが、本稿では祭りの構成などからト占神事としての的射行為を検討し、直会として付隨している「大飯食らい」について紹介してみたい。

II 沿革

1. 淀川集落

二丈淀川地区は糸島市の西部域(旧二丈町)に位置し、脊振山系より連なる二丈岳(標高711m)東側の中山間地域にあたる。村落は二丈岳から派生する丘陵上に立地しており、二丈岳に源を発する柳川が南側を貫流している。また、集落は山頂へと続く道路に沿って形成されており、現在では20戸程で構成されている。

村落名の由来は集落の西側上方、二丈岳裾野に当たる「陣の尾」で起こった南北朝争乱期の合戦（大内氏と大友氏による二丈岳の合戦）において、柳川に戦死者の血が淀んだという言い伝えに起因していると言われ、柳川の名も「矢流れ川」が転化したものと伝えられている。



第1図 位置図



第2図 淀川集落の主な宗教施設

2. 宗教施設（図版1）

現在、集落内には淀川天神社以外に幾つかの小堂、祠が建てられている。また、古記録には記載されているものの既に廃絶したものがあるため、ここでは今日、確認できるものについて概要を記したい。

1) 淀川天神社

百々手祭りが行われる社で、淀川集落の総社である。菅原道真を祭神とし、境内に祇園社が合祀されている。祭日は9月25日。

2) 觀音堂（新月寺址）

公民館の西50mに位置する小堂で、本尊は觀世音菩薩立像。「糸島新四国西部靈場」の50番札所となる。同地の小字名は龍源寺であるが、地元では「新月」と呼んでおり、天保11（1840）年に書かれた『神社仏閣書上 淀川組村々』（以下、『書上』）に記されている觀音堂（新月寺址）に当たるものと考えられる。

毎年、8月18日に「お觀音様」と称する觀音祭りが行われている。

3) 觀音堂

集落のほぼ中央に位置する2間×3間の小堂で、両手とも後補された觀音菩薩立像が祀られている。同所では祭りや祭典などは行われることはなく、明らかに異質な施設と言える。想定の域を出ないが、『書上』に記されている字龍源寺にあった薬師堂が今日では認められないため、何らかの理由で村中に移設されて二つ目の觀音堂となったと考えられる。

III 祭りに由来

淀川の百々手祭りが記録上で最初に確認できるのは、今のところ『書上』の淀川村の項である。書上には「正月廿五の祭礼、社人産子同寺へ打ち寄り、桑の弓、蓬の矢にて百手的矢など仕り、俗に百手祭りと申し候」と記され、19世紀中頃には的射が行われていたことが確認できる。また、大飯食らいの記述については『書上』には記されてはいないものの、使用されている椀を納める木箱に「文久四年甲子正月吉日」（1864）と記されており、この頃には既に百々手神事に付隨し

ていたことが想定される。

IV 祭りの構成

現在の行われている形態を項目ごとにまとめてみたい。

1. 組織

御座（1名）、寄子（4名）から構成される座方4名が選ばれ、配膳から給仕まで「大飯食らい」の一切を取り仕切る。

2. 前準備

百々手祭りの前までには、座方と呼ばれる世話役たちによっていくつかの前準備が行われている。

1) 米切り

集落を構成する各戸（現在では祭りに参加する戸数となる）から米1升を徴収するもので、徴収後は藁紐に結び目を付ける。徴収は下組より始められ、最終的には結び目の数と戸数を照合することにより、切り忘れを確認する。

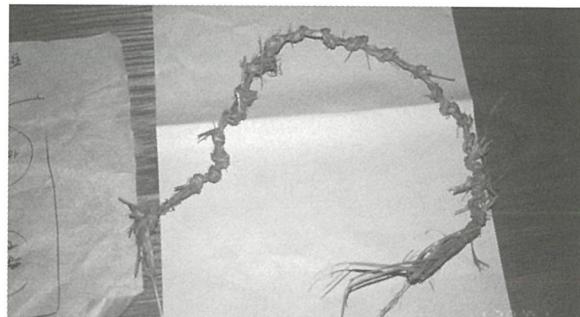


写真1 藂紐

2) 芹取り

祭りの一週間程前に座方によって、芹取りが行われる。芹は集落内に自生しているものが採取されている。

3) 弓矢

的射に使用する弓矢は、参加する各戸が自作する。材質は弓にはイソズキの生木を用い、矢は篠竹によって数本が作られている。

4) 的

的射に使用する的是編み込んだ竹の上に和紙を貼ったもので、中心に△記、その外側に3重の円が描かれる。また、上方には「上」と記されている。

3. 百々手（的射）神事

祭り当日、座方の家々では早朝より公民館に集まり、神事や直会の準備が進められている。

午前11時に近付くと弓矢を携えた各戸の代表者が淀川天神社の拝殿に集まり、深江神社の宮司の到着を待つ。その後、祭典から直会（大飯食らい）までの一連の神事が続くが、この項では時系列に沿ってその場面を紹介してみたい。

1) 祭典

午前11時、深江神社の宮司が到着すると拝殿の戸を締切り、外部と遮断した空間で厳かに祭典が執り行われる。

2) 的射

祭典が終わると宮司と各戸の代表者たちは天神社鳥居前に設けられた的射場に集まり、的射神事を行う。

神事としての的射は深江神社より招かれた宮司が行い、5射1組を3度繰り返し、合計15手の矢が放たれる。的射の最中では1手毎に歓声が上がり、集落の人びとの豊年への思いが窺える。

3) ト占

宮司による的射が終わると、座方や集落の長老らによって年占が行われる。

占いは宮司による的射で行われ、米の豊不作の判断は矢が的の中心を射抜いているかではなく、宮司が放った15手の矢の射抜き具合で判断されている。

4) 家長による的射

ト占が終了すると、家長（各戸の代表）が一列に並び、同様に5射1組で3度の的射を行う。

この的射行為は宮司のそれと違い、ト占を行うことはなく、家内安全、無病息災の願掛けとして行うものと言われている。

5) 山打ち

全ての的射が終了した後、宮司を除く全員が公民館横の高台に並び、柳川を挟んで眼前に迫る二丈岳に向けて一斉に矢を放つ。「山打ち」と称される行為であるが、二丈岳自体が靈山として神格化された山であり、悪霊退散、集落安泰のために

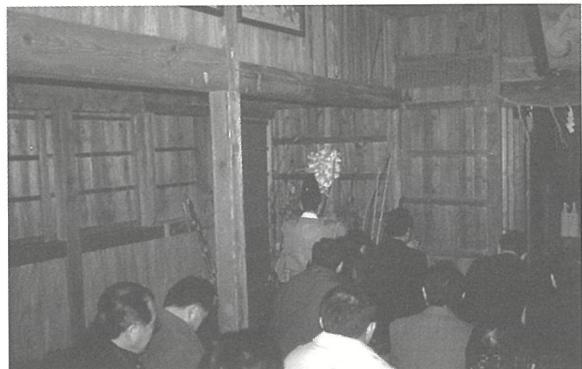


写真2 祭典風景



写真3 宮司による的射



写真4 ト占風景



写真5 家長による的射

矢を放つと言われている。

6) 弓矢の破棄

山打ちまでが終了すると、各自使用した弓矢はその場で手折られ、的とともに焼却される。この行為によって百々手神事としては終了となる。

V 大飯食らい

次に百々手祭りに付随する大飯食らいについて紹介したい。百々手神事終了後、正午過ぎに天神社前の集落公民館に場を移して行われる直会であるが、聞き取りによると、「今年も多くの白飯が食べられるように、高盛りの飯を食べ続ける」と言われている。春先の予祝としての意味合いが強く感じられるものである。

以下、その流れをまとめてみたい。

1. 席次

「□」形に着席し、上列の中央に宮司と区長が、その左右に各2名の長老が着く。また、左右の列から下列にかけては上座より年長者の順に着き、初めて参加する者や来客は下列に着座する。

2. 膳

「本膳五菜の膳」と呼ばれ、せりと鯨、なますと鰯の焼き物、大豆と大根の煮物、磯菜汁、御飯が並べられる。調理は座方の女性たちが行うが、配膳、給仕は男性が取り仕切り、女性は座敷には立ち入ることができない。

3. 大飯食らい

大飯食らいは、神事後の直会として行われる。座方は上列の宮司、長老から順に酌をして回り、参加者は通常に盛られたご飯を食しながら、直会が始まる。

一般的な直会の光景として始まるが、1杯目を完食する頃になると寄子たちによって、高盛りのご飯が運ばれてくる。流れ的には、これ以降が大飯食らいの始まりであり、場の雰囲気が一変する。3杯目以降ともなると固めながら高く盛られ、食べ終える前には椀を奪い取られて、おかわりを無理強いされていく。この時の寄子との掛け合いや後ろ手に椀を隠す光景、また、お祝い事があった家には「祝いましょう」と発して徳利の水を頭か



写真6 山打ち風景



写真7 席次



写真8 本膳五菜の膳



写真9 大飯食らいの光景1

らかける慣わしにより、一気に場が盛り上がっていくこととなる。

予祝としての儀礼のため、つがれたご飯は残さない慣わしであるが、椀に残った飯に「マゴ」と呼ばれる汁を注ぐことによって食べ納めとなる。

VI 後座

1. 座方決め

大飯食らいが終了すると、本年当番の座方を除き、クジ引きにより翌年の御座、寄子が決められる。平等性を保つためにくじ引きを行っているが、20戸余りから構成されているため、4年に1度は座方が回ってくることになる。座方の決定後には当年の状況や新たな申し送り事項が次年度の座方へと引き継がれ、連名帳に名を記すこととなる。なお、今に残っている連名帳では明治18（1885）年が最も古い記載年となっている。

2. 慰労（大飯食らい）

各戸の代表が帰った後、新旧の座方のみで行われている。膳が準備され、当年の座方が着座して大飯食らいが始められる。ただし、直会とは違つて適度の加減が加えられるため、1年間の労をねぎらう意味合いが強いものと考えられる。

VII まとめ

以上、淀川の百々手祭りの状況を紹介してきたが、ここでは他地域の状況を含めてその重要性を述べて終わりしたい。

1. 他地域の百々手神事

「百々手祭り」と称するものは、淀川地区以外にも糸島市波多江の産宮神社で行われている。同社では宮司と宮役のみで行われているが、形態的には魔性を鎮める宮儀礼と言え、民間儀礼である淀川とは大きな違いを見せる。

淀川地区同様の事例については、白川氏によつて豊前市の類例が詳しく紹介されているが、一般的に北部九州では、正月行事（年占）として福岡県豊前地方、大分県中部から国東半島に多く分布している。また、四国の香川県、徳島県には春行事（予祝）として分布し、愛媛県の越智郡などで

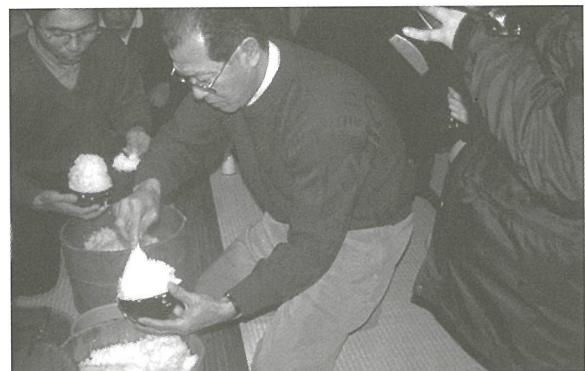


写真10 大飯食らいの光景2

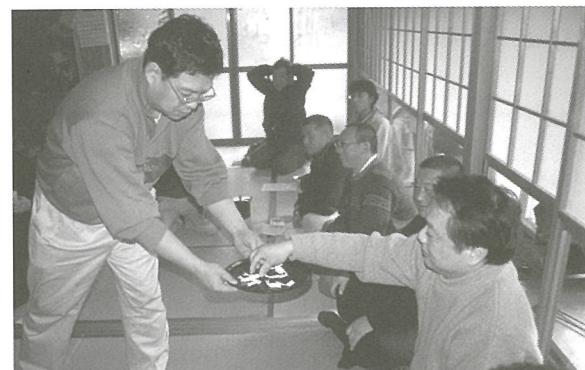


写真11 座方決め

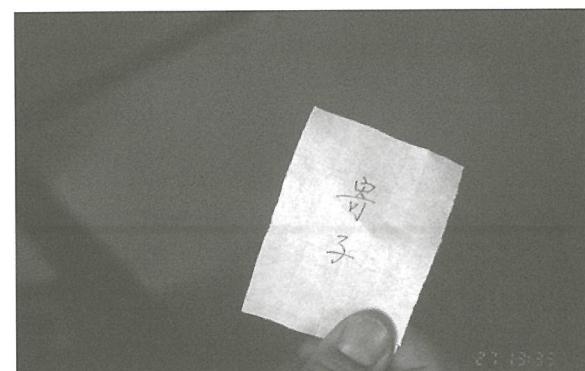


写真12 くじ

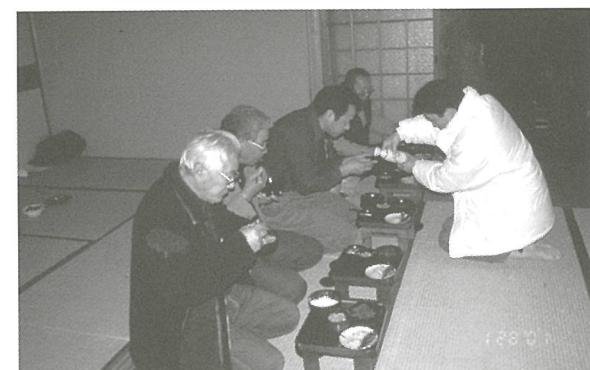


写真13 大飯食らい（慰労）

は青年戒として行われているとされる。

2. 形態と重要性

淀川の百々手神事については、的射による年占神事ではあるが、「山打ち」にみられる集落安泰としての祈願の意味合いも強く、これに「大飯食らい」という民間での予祝行事が融合して形成されたものと言える。しかしながら糸島西部域にあたる淀川集落でのみ行われているものであり、近隣地には見られない特異な儀礼とも言える。こうした現象は中世以降、糸島地方の脊振山系一帯に伺える顕密寺院が影響しているとも考えられており、今後とも、古文書等を含めた総合的な調査が必要である。また、19世紀中頃以降、その形態に変化が見られない祭りの構成を考えると糸島地方でも重要な民俗文化財のひとつに数えられよう。



写真14 産宮神社 百々手祭り 祭典



写真15 産宮神社 百々手祭り 的射

参考文献

- 1) 『糸島郡神社明細帳 昭和17年度』
- 2) 『神社仏閣書上』 川上家文書
- 3) 吉川弘文社『日本民俗大辞典（下）』
- 4) 古川秀幸 『深江川祭り』 二丈町民俗文化財調査 報告書第1集 2002
- 5) 中西裕二 「祭礼と信仰」 『二丈町誌—平成版—』 2005
- 6) 古川秀幸 「二丈町の民俗行事」 『二丈町誌—平成版—』 2005
- 7) 白川琢磨 「北部九州における宗教民俗の歴史的動態—淀川「大飯食らい」を中心に—」 『福岡大学研究部論集』 2006
- 8) 由比章祐 『怡土志摩地理全誌』 ① 怡土篇 1989

本稿に掲載した内容ならびに写真は、平成19年から23年に調査したものを中心としている。

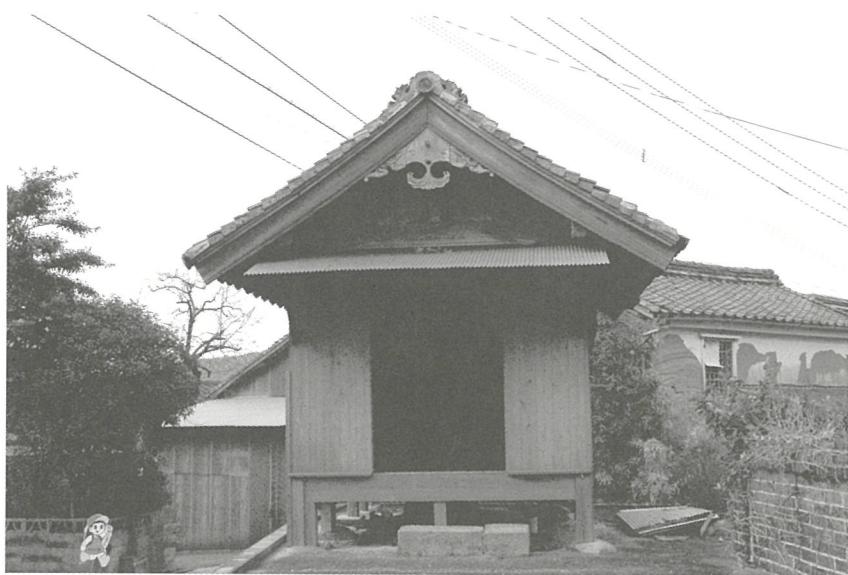
本文で後座や慰労といった項目名を使用しているが、淀川百々手祭りの中での名称、表現ではない。



淀川集落遠景



淀川天神社



村中の觀音堂



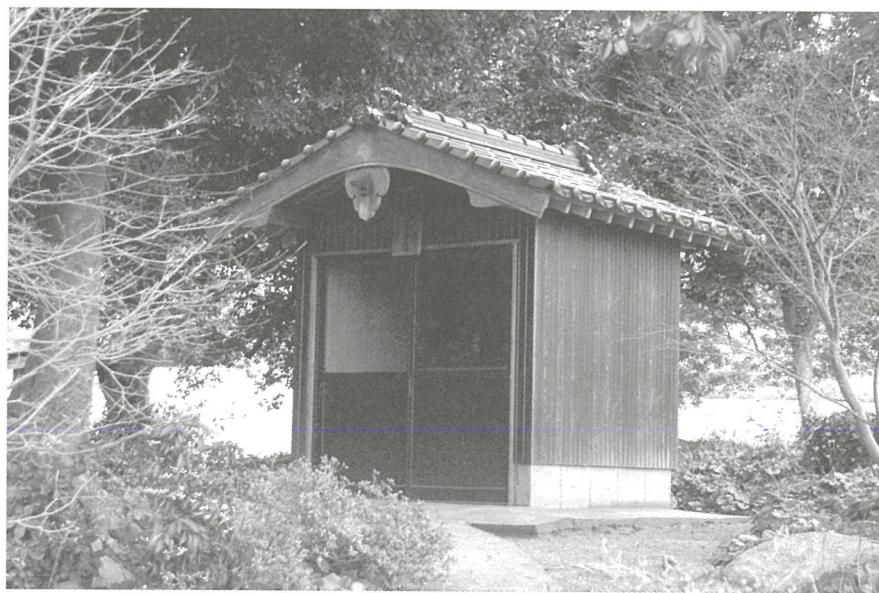
觀世音菩薩立像



觀音堂の杜



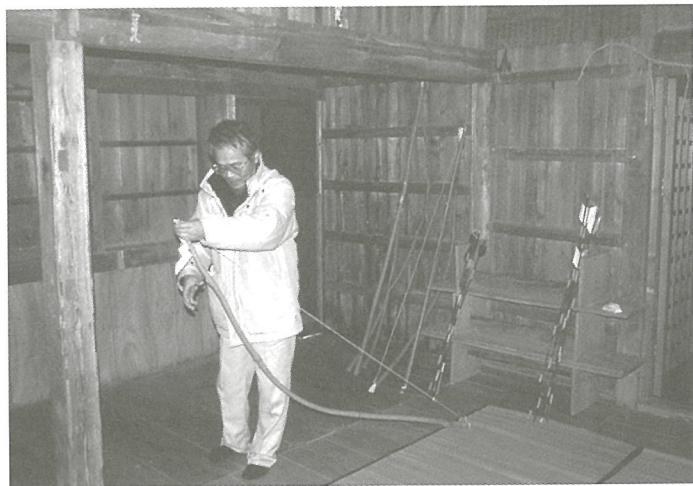
お觀音様の光景



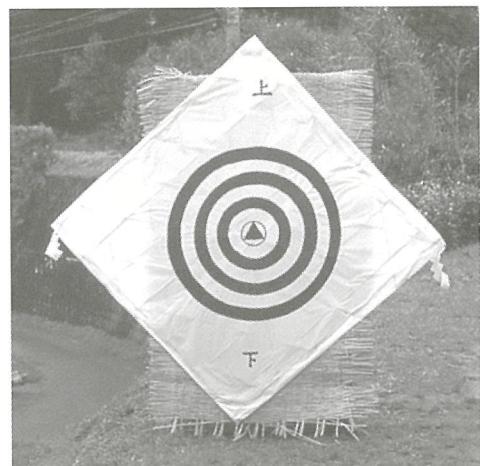
觀音堂（新月寺趾）



觀世音菩薩立像



弓と矢



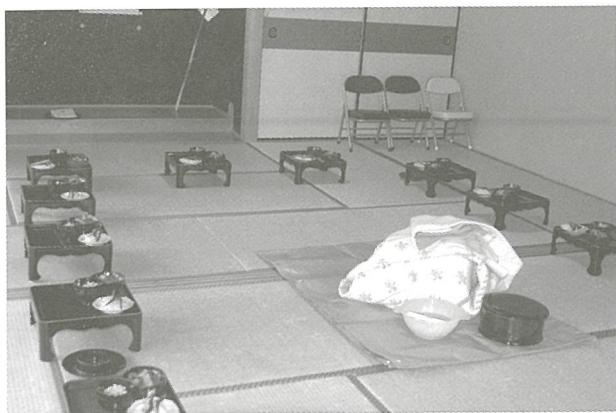
的



百々手神事



淀川公民館



公民館内



大飯食らい



椀



木箱銘



連名帳

上原勇夫氏採集資料

～今山遺跡採集の石器類～

江野 道和（伊都国歴史博物館）

I はじめに

糸島の東端に位置する今山は、良質の玄武岩を産し、石斧の一大産地として名高い山である。学史上も欠くことのできない重要な山で、その調査・研究の歴史は古い。学史は、大正12（1923）年の中山平次郎博士の調査を嚆矢とし、合計8次に渡って福岡市教育委員会を中心とするトレンチ調査や分布調査などが行われてきた（表1）。また、在野の考古学者や歴史愛好家たちの収集のメッカでもあり、原田大六氏の収集資料や元玄洋公民館の大内士郎氏の資料（大内1994）などが有名である。

さて、本稿で資料紹介をする故上原勇夫氏の採集資料について、大内氏から相談を受けたのは平成21年度のことであった。当館の学芸員であつた三嶋直子（当時檣崎）と私の二人は、上原氏の資料が保管されていた横浜自治会館へ行き、状況を確認した。資料は自治会館の屋外倉庫の内外に野積みにされおり、特に外の遺物はいつ盗難を受けてもおかしくない状態で、早めの対処が必要であった。また、当日立会をいただいた大内氏からは資料の説明と上原氏の遺族から寄贈の願いがある旨をうかがつた。

伊都国歴史博物館は「伊都国」を展示の中心テーマに据えた館であるが、伊都国の交流を物語る遺跡「今山」については隣市に位置することもあり、出土品をほとんど収蔵していない状況であった。そこで、寄贈を最終目標とし、これに向けて、遺物の内容を確認するための予備調査を行うこととした。なお、大内氏の仲介で、上原氏の資料は、当館と福岡市博物館で半分ずつ保管することとし、現地で分配した後、当館分を預かった。

平成22年度から資料の整理作業に着手し、水洗作業、分類を行った。また、主な遺物については、写真撮影および実測作業を行った。

本稿では、上原氏の残した採集記録から収集の状況と概要を紹介するとともに、採集品の内、主

なものについて取り上げ、資料紹介としたい。

II 上原勇夫氏の採集

上原氏は遺物の採集にあたって、B5サイズの罫紙3枚に渡る手書きの記録を残していた。ここでは、勝手ながら氏の記録を活字に起こすとともに、活動の概要を紹介したい。

1) 採集期間

上原氏の採集記録（表2）の中には、「月・日」の記述は有るもの、「年」の記載が無い。このため、残念ながら正確な記録の年はわからない。ただ、上原氏の知人であった大内氏にうかがうと昭和50年代頃に拾っているのを見たとのことである。また、遺物に付けられたラベルの中に「与吉山畠58. 2-3」（昭和58年の2~3月の意味か）と記されたものがあることから、少なくともこの年月以降には採集活動を開始していたことがわかる。

一方、採集記録の中には、福岡市教育委員会が昭和59年度に行った第6次調査のトレンチが記されている（1月15・16日、2月1日）ことから、記録が書かれたのは昭和59年以降であることがわかる。また、遺物の注記の中には、「6□. 3. 26」（□の文字は消えかけており、正確な判別は困難）と書かれているものがあることも加味して推測すると、記録の年は、昭和59年～60年代前半であった可能性が高い。

なお、記録された期間は、12月11日から始め、年を跨ぎ2月17日までの約2ヶ月間。延べ日数としては47日に上る。ただし、上記のとおり、昭和58年の日付が書かれたラベルの存在や、「6□. 3. 26」の注記、その他にも「3月10日」「早川3月16日17日」などのラベルがあることから、記録された期間の前後にも詳細はわからないが、活動が行われていたと考えられる。

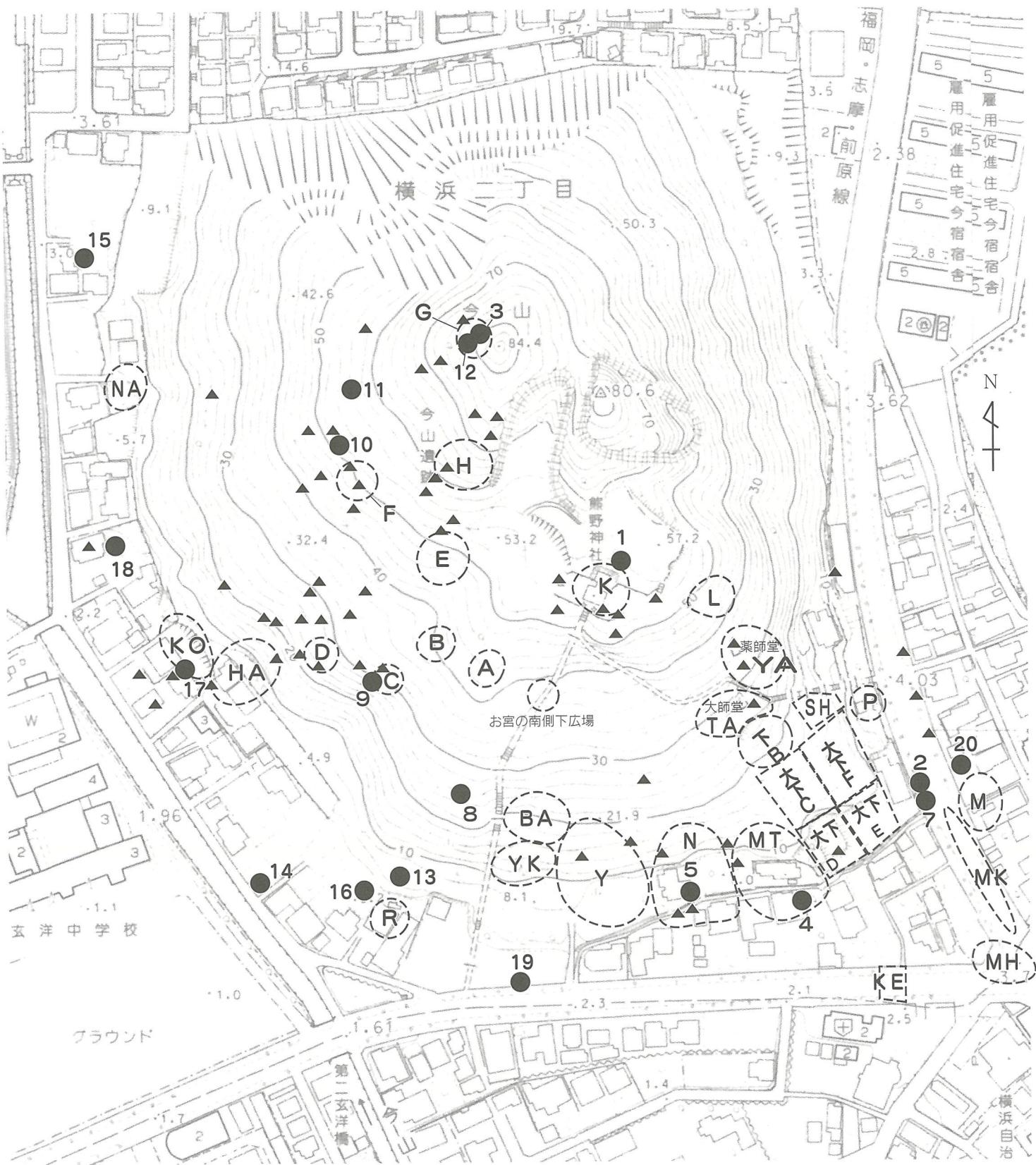


表1 今山遺跡発掘調査地点一覧

地点	地点 調査・確認年月	調査主体(担当者)	内 容	備 考	文献
1	大正12年早春	(1923年)	中山平次郎博士 熊野神社の後側で、玄武岩の露出を発見。周囲に石斧未製品が散乱しているのを確認		1
2	昭和5年4月	(1930年)	中山平次郎博士 鉄道開鑿により露出した包含層を調査。石斧未製品と弥生土器などを確認。	この年は5ヶ月間にわたって、踏査	1
3	昭和43年12月	(1968年)	福岡市教委(下條信行) 西の山頂、標高82mの地点で、長径4.5m、幅2m、厚さ2mの露頭が横たわる。	【第1次調査】 文献(2)では、第3遺跡	2
4	昭和43年12月	(1968年)	福岡市教委(下條信行) 石斧未製品のほか、弥生土器、玄武岩塊、石屑片などが出土	【第1次調査】 文献(2)では、第4遺跡	2
5	昭和49年3月	(1974年)	福岡市教委(下條信行)	【第2次調査】	—
6	昭和51年7~8月	(1976年)	福岡市教委(折尾学) 銅劍・勾玉などが出土	※第1地図の南東範囲外	3
7	昭和51年7~8月	(1976年)	福岡市教委(折尾学) 石斧未製品163点、製塙土器、玄武岩の剥片などが出土	【第3次調査】 文献(3)では、42-43地点	3
10	昭和59年10~11月	(1984年)	福岡市教委(井澤洋一、米倉秀紀) 多量の剥片と石斧未製品出土	【6次調査】	4
11	昭和59年10~11月	(1984年)	福岡市教委(井澤洋一、米倉秀紀) 柱状原石と多量の剥片、石斧未製品出土	【6次調査】	4
12	昭和59年10~11月	(1984年)	福岡市教委(井澤洋一、米倉秀紀) 玄武岩露頭周辺で、多量の剥片と石斧未製品出土	【6次調査】	4
13	昭和59年10~11月	(1984年)	福岡市教委(井澤洋一、米倉秀紀) 奈良時代の掘立柱建物検出	【6次調査】	4
16	昭和59年10~11月	(1984年)	福岡市教委(井澤洋一、米倉秀紀) 遺構確認調査	【6次調査】	4
17	昭和59年10~11月	(1984年)	福岡市教委(井澤洋一、米倉秀紀) 原石と石斧未製品、多量の剥片出土	【6次調査】	4
19	平成8年7月	(1996年)	福岡市教委(米倉秀紀) 石斧未製品4点、叩石1点、剥片、弥生土器などが出土	【第7次調査】	5
20	平成11年9~12年3月	(1999年)	福岡市教委(米倉秀紀) 縄文時代石斧未製品、縄文前~後期初頭の土器他出土	【第8次調査】	6

※【第1次調査】から【第5次調査】にかけては、報告書により次数に混乱が生じている。この表は文献4に従って作成した

※【第5次調査】は、今山南東麓に2ヶ所のトレンチを入れる。製塙土器のみ報告

※【第6次調査】の8~9・14・15・18の調査区は、内容がわからぬため欠番とした

表2 上原勇夫氏 今山遺跡採集記録

月	日	場 所	作業	内 容	備 考
12	11	お宮の南側下広場	採	石6個	石は石斧未製品か。以下同じ
	15	永田裏山(N)	採	石7~8本、叩石3個 軒下置	
	16	昭三氏小屋	採	叩石2~3個	場所の特定不能
		秀次郎宅裏	採	石2本	場所の特定不能
	22	永田(N)、お宮(K)	採	石7~8本	
		倉助宅(M)	採	温石3個	温石=滑石
	23	倉助氏山畑(大下C・大下D)	採	石製品折10本、叩石17~18個 外、石未製品沢山。2袋+2袋 全部(で)50~60個位い 「石大7個、小26個、叩石15個」	
	24	倉助(氏山畑か?)(大下C・大下D)	採	石製品8本、叩石20個 深く掘る。巾も広くする。30種掘下げる。 石大7本、小5個、叩石6個	石製品は石斧未製品か
	25	倉助(氏山畑か?)(大下C・大下D)	採	石大6、小6、土器沢山12個位 石大10、小13、叩石15個	
	28		採	石斧取り	
1			洗	洗い「23日、24日分外、叩石23個有」	
	30		採	石斧 叩石	
	31			<空欄>	
	1		採	石斧 叩石 2袋	
			洗	石斧洗い	
	2		整	(採集品の数を) 調 石 叩石 23日 大7、小26 23 15 24日 大7、小5 6 25日 大10、小13 15 (合計) 大24、小44 59	
	3,4、 5		休		
	6		採	石7~8本 叩石14~15個 土器	
	8	文男(SH)、大師堂(TA)、猛畠(大下F)	採	石1袋、叩石1袋、外5袋、計7袋	

月	日	場所	作業	内容	備考
	9		回	猛畠(大下F) 8日採集分運搬5袋	運搬の5袋は、8日の外5袋に該当
	10	永田(N)、安見(Y)	採	石6~7本。先日分加える 軒下置	
	12	早川(HA)裏	採・洗	1袋。12日洗い	
	13		洗	石斧洗、箱詰め	
	14	猛(大下F)	採	石15~20本、叩石、土器5個、温石1個 (合計) 3袋	温石=滑石
		倉助(M)	採	叩石 1袋	
	15	4号トレンチ(第1図-●11)下	採	1袋	
	16	今山頂上(G)	採	石3~4本、スリ鉢底	
		4号トレンチ(第1図-●11)横上	採	石7~8本 (計) 2袋	
	17	お宮南側下広場	採	石4袋	
	18	猛(大下F)	採	石、叩石 2袋	
		倉助(大下C、大下D)	採	石小5~6個 叩石 1袋	
		猛(大下F)	採	石小 1袋	
1	19		回	猛の18日2袋、倉助18日1袋、19日猛1袋取り 計4取り	現地に置いていた袋を取りに(回収しに)行ったのか
			整	猛 18日「3-3」-「3-2」-「3-1」分	「」内は袋に付けた番号か
	20	猛(大下F)	採	2袋	
		倉助(大下C、大下D)	採	石7~8、叩石6~7個「赤石」 1袋	
	21	猛山畠(大下F) (猛の)上部右側上畠	採	全部終わる 2袋	
			採	石14~15本、叩石多数、土器多(数)	大下FとSHの間か
	22	猛(大下F)右側	回	昨日(21日)掘 1袋 残り1袋置く→1袋持参	21日の採集品計2袋を2回に分けて持つて帰ったということか
		文男(SH)	採	石2本、叩石4個	
		池松(大下E)	採	石1、叩石5	
	23		回	猛(大下F)1袋、倉助(大下C、大下D)1袋持ち帰る。計2袋	
	25	倉助(大下C、大下D)	採	石7~8、叩石50、紋入瓦「藤黒田藩の紋」後片付	
	26	倉助氏山畠(大下C、大下D)	採	倉助氏山畠、今日午後埋立て始める。埋立てる時が良いものが出る。石15~16個、叩石60個。2袋持ち帰る、残3袋	
	27		洗	倉助石斧洗い。25日「2-2」、26日「2-1」、「2-2」。27日分4袋洗い。	
	28		洗	終日石斧洗い。猛(大下F) 17~18袋、 倉助(大下C、大下D) 6~7袋 9:30~15:30	
	31	猛氏(大下F)右側上	採	2袋	
		3号トレンチ(第1図-●10)	採	「5~6石斧」半袋	
1		永田裏山(N)	採	1袋半	
		猛(大下F)	採	1袋	
		倉助(大下C、大下D)	採	1袋	
			整	2袋午前中(3号トレンチ、N) 2袋午後(大下F、大下C、大下D)	1日の採集総量
2	猛(大下F)		採	残り物石斧7個	2ヶ所の合計で2袋か
		倉助(大下C、大下D)	採	石大、温石大1 2袋	
3	猛(大下F)		採	石大6個	2ヶ所の合計で2袋か
		倉助(大下C、大下D)	採	石8個、叩石3個、叩石大1個、温石大1 2袋	
5	猛(大下F)、倉助(大下C、大下D)		採	残り物抱い小型 2袋	
7	倉助(大下C、大下D)		採	石小物 1袋	
	猛(大下F)右側上		採	1袋	
8	喜代美氏小屋		採	石斧仕上げ品折れ1本、叩石1、4=宅、温石(合計) 1袋	場所の特定不能 4=宅とは4袋を自宅に持ち帰ったということか
9			洗	5、7日分4袋洗い	
10	猛(大下F)右側上		採	石斧3~4、叩石20 (合計) 1袋	
11	猛(大下F)右側上		採	石2~3、叩石10、カメの底土器 (合計) 1袋	
12	池松(大下E)横畠		採	石2~3本	2ヶ所の合計で2袋か
	猛(大下F)右側上		採	石4~5本 2袋	
13	八幡(P)、文夫(SH)畠、安川(YA)畠		採	石斧3~4本、叩石10個 (合計) 1袋	
	倉助畠(大下C、大下D)		採	原石1袋	
14	安見(Y)裏山、与吉畠(YK)横		採	石斧小沢山 2袋	
15			整	石斧保存柵作り	
16	佐伯畠		回	安見(Y)裏、14日掘り取り	
			採	砥石1、叩石1、石包丁1 2袋	場所の特定不能
17	横浜歩道電柱建穴		採	叩石4、温石1	場所はMKか

※()内は筆者が加筆。他にも、記述や漢字、送り仮名などを統一した部分がある

※「作業」箇は筆者が分類。採=採集 回=遺物の回収 洗=洗浄作業 整=整理作業

2) 採集記録概要（表2）

上原氏は今山における採集をお宮の南側下広場から開始している。開始日となった12月11日には、石斧未製品6点を現地にて採集した。これから22日までの4日間は、今山の中腹にある熊野神社から山麓の南側および南東側まで広く歩いており、採集した点数も比較的少ない。したがって、この期間は採集よりも分布状況の確認に重点を置いていたものと考えられる。

続く23日からは採集活動が本格化する。採集地点を南東麓、特に大下C・D・F（第1図）を中心とし、基本的に年明けの1月14日までこの周辺で収集を行う。中でも、1月8日には7袋分を採取しており、一日あたり量としては最多となった。したがって、この日は全ての遺物を持ち帰れなかつたのか、翌日9日に5袋ほど回収したようだ。このように、採集→後日回収の流れはこの後も散見されるようになり、「採集日は作業に集中」し、

「回収は別の日に行う」手順が出来上がったものと思われる。なお、12月28日～1月1日までは収集した員数が記録されておらず、後日纏めて書かれたように見える。年末・年始の慌ただしい時期、採集はしたもの、記録を付ける暇が無かつたようすが垣間見えるようだ。

1月12日、15～17日の4日間は、今山山頂から中腹および西側へ採集地点を移動する。この期間には「4号トレンチ下」や「4号トレンチ横上」という記載があり、福岡市教育委員会が行った調査トレンチを基準に自身の採取地点を表していることがわかる。このトレンチについては同教育委員会の刊行図書には位置の記載がないため、上原氏は、調査の現地説明会や講座に積極的に参加して、トレンチ名を含む情報を得た可能性が高い。

1月18日からは再び南東斜面に採集地点を移動する。21日には大下F地点での記述に「全部終わる」とあり、良品を拾いつくしたのかも知れない。このあと、しばらくは当地点での採集は途切れるが、26日には好機が訪れたようだ。「倉助氏山畑、今日午後埋立て始める。埋立てる時が良いものが出て」との記述があり、土を動かしたことにより、新たな遺物を得たようだ。上原氏の記録は基本的に遺物名や数量、作業内容の箇条書きで有り、このように文章が入ることは異例である。氏の期待と喜びが伝わってくるようである。なお、

この前日25日には「後片付」とあり、埋立て工事の妨げにならないようにとの気遣いも見られる。続く、27・28の両日は石器の洗浄作業。2日合せて30袋に近い膨大な数の遺物を洗っている。なかでも28日の項目には、わざわざ「9:30～15:30」と作業時間を記しており、水作業に6時間従事したことのつらさや終わった後の達成感などが伝わってくるようである。

1月31日からは採集活動を再開。途中に洗浄作業を挟みながら、基本的に南東麓を中心として2月12日まで収集を行う。続く2月13日以降には南麓にも移動し、15日には石斧を保管するための柵の製作。遺物の量が増え、軒下（12月15日や1月10日に「軒下置」とある）に収まりきれなくなったのだろう。記録の最終日、17日には歩道の電柱を建てる穴からの出土品を採集したことが記される。

3) 採集記録から見た遺物の内容

上原氏の記録を見ると、石斧の未製品のみでなく、叩石にも注意を払っていることがわかる。採集開始から2日目の12月15日には3個の採集があり、下って、1月25・26の両日には合せて100個を超える膨大な量の叩石を拾っている。また、手書きの採集資料には、石斧と叩石の双方が丸印で囲まれ、並列して書かれていることから、氏が叩石を石斧と同等の重要遺物に位置づけていたことがわかる。この他、数量は少ないものの滑石製品（記録中では温石）や土器、瓦、石包丁にまで採集が及んでおり、石斧のみに囚われず、非常に広い視野を持って活動を行っていたことがわかる。

なお、全体の採集量は約67袋。個別に記録された遺物としては、石斧約271点、叩石約264点、滑石約7点、土器約19点、瓦1点、石包丁1点、砥石1点である。

一個人の収集品としては膨大な量といえる。

III. 主な遺物

1) 資料の概要

上原氏の採集資料は上記の記録に残されたもの以外にも有り、数が非常に多い。また、残りの悪いものや使用および加工痕跡などが見られないものも混入している。したがって、残りの良いものや特徴的なものを抽出し、観察や計測等の作業を行った（表3～11）。この作業結果について、以下に報告する。

当館預かり分の上原氏資料は、総数で454点に上る（第6図）。前段で紹介した記録内容のとおり、石斧未製品と叩石が中心を占め、続いて、打製石斧未製品、石包丁未製品、石鎌、石錘、石剣や石戈の未製品の可能性のあるもの、砥石などがあるが、いずれも石斧・叩石に比べると数は少ない。また、その他の遺物としては、瓦片や土器片、作業台と考えられる石製品、石斧製作時のチップ、判別不明のものなどがある。なお、瓦については、上原氏記録（表2）の「1月25日」の項にある「紋入瓦（藤黒田藩の紋）」は見当たらなかった。失われた可能性が高いと思われる。

以上、資料の概要について述べたが、引き続き、遺物ごとの詳細について見て行きたい。

2) 石斧未製品（表3）

石斧の未製品は、その可能性があるものを含めると237点に上る。まず、採集地点について、不明や確定できないもの53点を除いたものをみると、南東緩斜面～裾にかけての大下F・C・D・Eが計144点、SHが10点で、全体の半分以上を占めていることが分かる（第7図）。既に述べた「上原氏採集記録」の中でもこの地点を中心に活動を行っていることが読み取れることから、採集品と記録とが照合できることがわかった。

つづいて、石斧未製品の内容について見て行きたい。残念ながら、このほとんどが途中で折損しているため全体が分かるものが少ないが、大きく分けると、大型（長さ20cm以上）のいわゆる太形蛤刃石斧、中型の蛤刃石斧（長さ16cm～20cm未満）・小型の蛤刃石斧（長さ16cm未満）、その他薄刃の石斧等がある。折損等が少なく、ほぼ全体が分かるもの61点を抽出し内訳をみると、

大型14点、中型21点、小型14点、薄刃12点となり、中型が最も多いものの、バランスのとれた構成であることがわかる。

石斧の觀察にあたっては、製作工程をI-粗割、II-打裂、III-敲打、IV-研磨の4段階に分類した。このうち、Iは、大型の母岩や露頭などから割り取った直後に近い段階とした。ただし、従来から指摘のあるとおり、転石などを原石として利用した場合、IとIIの差は明確でない。したがって、IとIIのいずれにも区分できないものを便宜上纏めてI～IIとした。また、続くIIとIIIの工程差についても、明確でない部分がある（折尾1981）。IIの最終段階で側縁部の調整を施すものの中には、細かな打撃を加えた痕跡の残るものがある。この側縁部調整剥離はそのままIIIの敲打作業につながっており、やはり、明確な区分が困難である。したがって、この段階をII～III工程とした。そして、敲打が側面部から表・裏両面に及んでいる段階をIII、研磨作業が開始された段階をIVとした。以上に従い工程段階ごとの内訳をみると、総点数237点のうち、Iが20点、I～IIが17点、IIが88点、II～IIIが17点、IIIが91点、IVが2点、明瞭な加工痕が見られず、原石段階と考えられるもの2点である（第8図）。今山の過去の調査成果でも報告されているとおり（折尾1981）、IIIの敲打段階までの欠損率が非常に高いことが当該表採試料からも読み取れる。

以上、石斧未製品の概要と構成比について見てきたが、引き続き、特徴的な遺物を抽出し紹介したい。

第2図-1（表3-81）は南東斜面に位置する大下F地点で採集された石斧未製品である。表裏両面とも粗い剥離が行われており、全体として亀の甲羅に良く似た形状となっている。工程としてはI段階にあたる。現状で、長さ19.2cm、幅13.2cm、厚さ6.4cm、重さ1.91kgを測るため、製品段階では15～16cm程度の中型蛤刃石斧となると考えられる。

第2図-2（表3-1）も大下Fの採集品である。表裏両面に剥離痕が及び、石斧としての全体的な形態もうかがえる。転石を利用している可能性が高く、工程としてはI～IIの段階にあたる。現状で、長さ22.4cm、幅12.1cm、厚さ8.7cm、重

さ3.41kgを測る。刃部および頭部の形状がほぼ定まっており、製品段階に至ってもサイズはそれほど縮まらないと考えられるため、長さで20cm前後の大型蛤刃石斧を目指していたものと思われる。

第3図-3（表3-169）は今山山頂近くのH地点で採集された。工程としてはⅡの段階に属するが、側縁部に調整剥離があり、形状が定まっていることから、上記の第2図-2よりも一步進んで敲打の直前の段階にあると考えられる。長さ22.4cm、幅9.5cm、厚さ6.7cm、重さ1.58kgで完成段階では大型石斧となる。

第3図-4（表3-80）は大下Fでの採集品である。縁辺部に調整剥離を施しており、工程としては上記第3図-3とほぼ同じくⅡの最終段階に属する。現状で長さ16.8cm、幅6.1cm、厚さ4.0cm、重さ520gで、仕上がりは長さ14～16cm程度の小型または中型蛤刃石斧になるとを考えられる。

第3図-5（表3-105）は南西斜面の大下Cで採集された。体部の途中で折れており、刃部付近のみが残る。刃部はきれいな弧を描き、縦断面はやや反る。第3図-3・4と同じくⅡの最終段階と考えられる。形態から小型で薄刃の製品となる可能性がある。現状で長さ7.8cm、幅5.2cm、厚さ2.3cm、重さ140g。

第3図-6（表3-4）は大下Fでの採集品である。表面の中央部付近に敲打痕が見られるものの、他の面には及んでいない。Ⅲ工程の最初の段階と考えられる。刃部が欠けており、このため廃棄された可能性がある。製品は中～小型の蛤刃石斧か。長さ15cm、幅6.4cm、厚さ3.6cm、重さ570g。

第3図-7（表3-36）は大下Fでの採集品である。全体的に風化が激しいため表面観察が困難であるが、部分的に敲打の痕跡が見られる。工程段階はⅢ、長さ17.1cm、幅5.8cm、厚さ4.7cm、重さ510gで、出来上がりは中型の蛤刃石斧と考えられる。

第4図-8（表3-13）は大下F採集である。表面から側面にかけて敲打痕が多く見られ、裏面にはあまり施されていない。敲打の途中で折れたものと考えられる。現状で長さ10.6cm、幅7.9cm、厚さ4.4cm、重さ380g。中型の蛤刃石斧となるのか。

第4図-9（表3-234）は、採集地点不明品である。刃部と中央部分のほんの一部を除いて、全面にびっしりと敲打が施されている。Ⅲ工程の最終段階に来ているものと思われる。現状で長さ8.7cm、幅8.2cm、厚さ5.0cm、重さ1kgで、体部の途中で折損するため元々の全長は分からぬが、大型の蛤刃石斧になるとを考えられる。

第4図-10（表3-185）は、折損部分に「茂氏宅前」と採集地点の注記がある。残念ながら現状ではこの地点の照合はできないが、今山の南東～西裾にかけての住宅地の中と考えられる。上原氏採集資料には、工程の研磨段階まで至ったものが2点ある。ここで取り上げた資料はその内の一つである。表面に研磨が施され、側面から裏面にかけては敲打痕がまだ残った状態である。研磨作業の途中で折れたものか。長さ7.6cm、幅6.0cm、厚さ4.3cm、重さ290gで、中型の蛤刃石斧になる可能性がある。

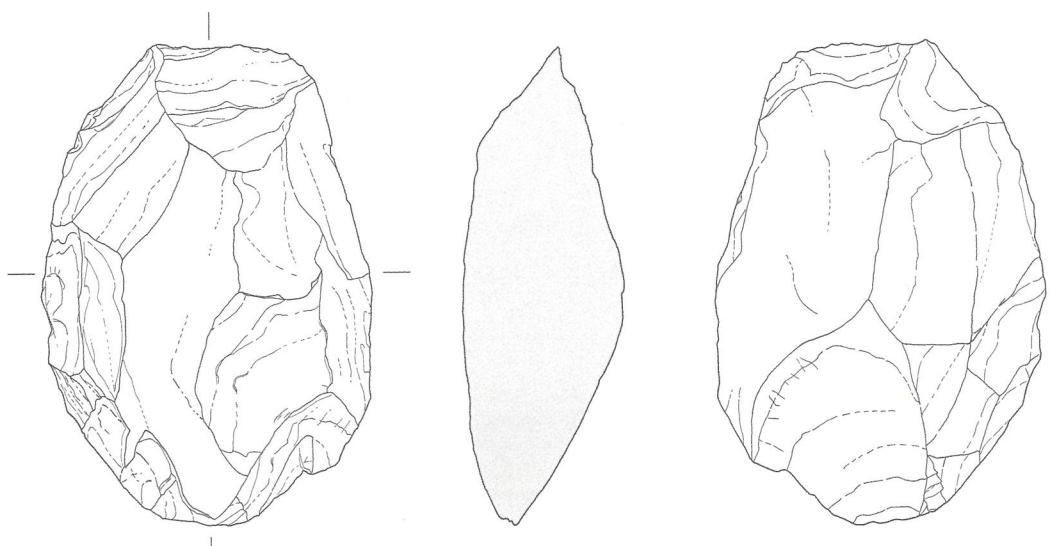
3) 叩石

叩石は総数で174点ほどあり、石斧未製品に次いで多い数となっている（第6図）。主に片麻岩や流紋岩系、玄武岩などを石材として使用し、形態は円形・橢円形・方形・長方形・台形・俸状など様々な種類がある。石のサイズは小さいもので長さ4～5cm、大きいものになると10cmを超えるものがある。また、重さについては、100g程度のものから1kgを超えるものまである。この形態、大きさ、重量などは、石斧等を作成する各工程段階に対応し、使い分けたものと考えられる。それでは、実物の資料に則して見て行く。

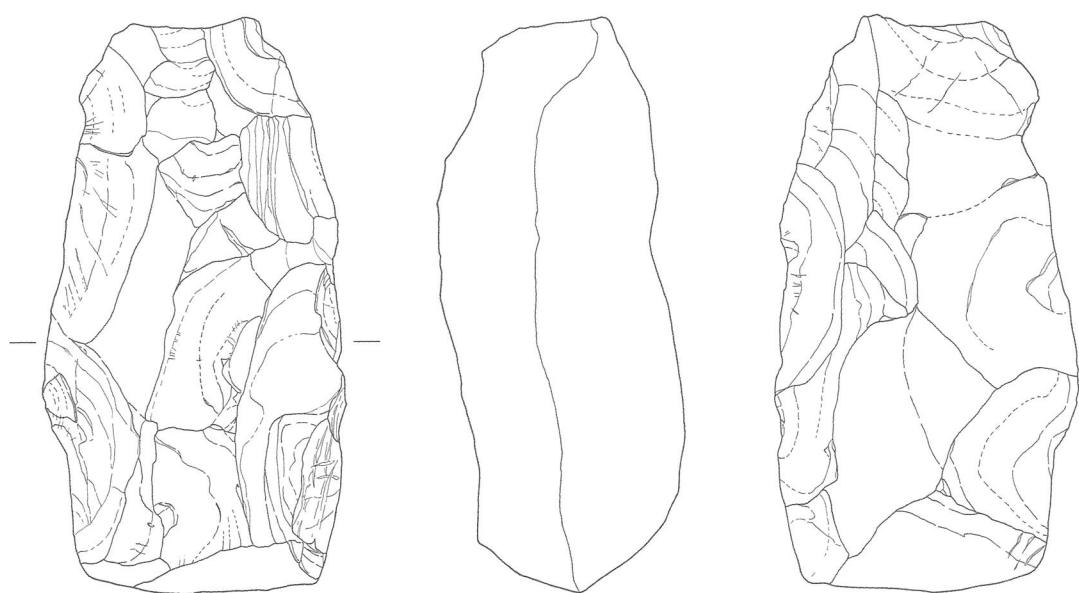
第5図-17（表4-132）は大下FDから出土したと考えられる。握りこぶし大の円礫を利用しておらず、長さ9.7cm、幅8.3cm、厚さ7.8cmで、重さ980g。大型の叩石で、表面には敲打痕が観察できる。玄武岩製で硬い。

4) 打製石斧未製品

打製石斧は3点ほどある。このうち、採集地点がわかっているものは2点あり、大下FとYKからの出土である。今山産の打製石斧としては、吉留秀敏氏（吉留2005）の論考が知られている。このなかで、出土地点については、今山山頂付近や



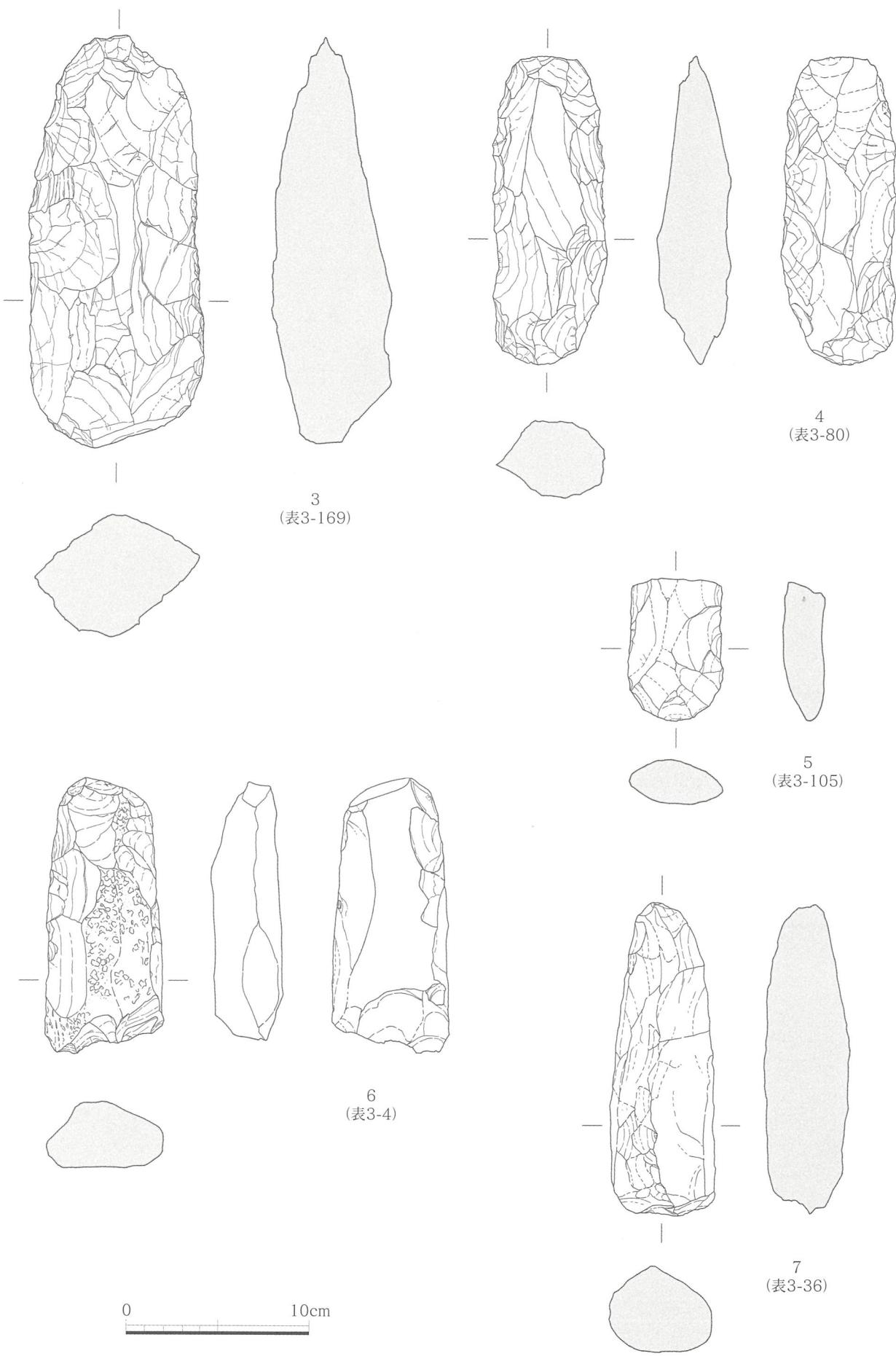
1
(表3-81)



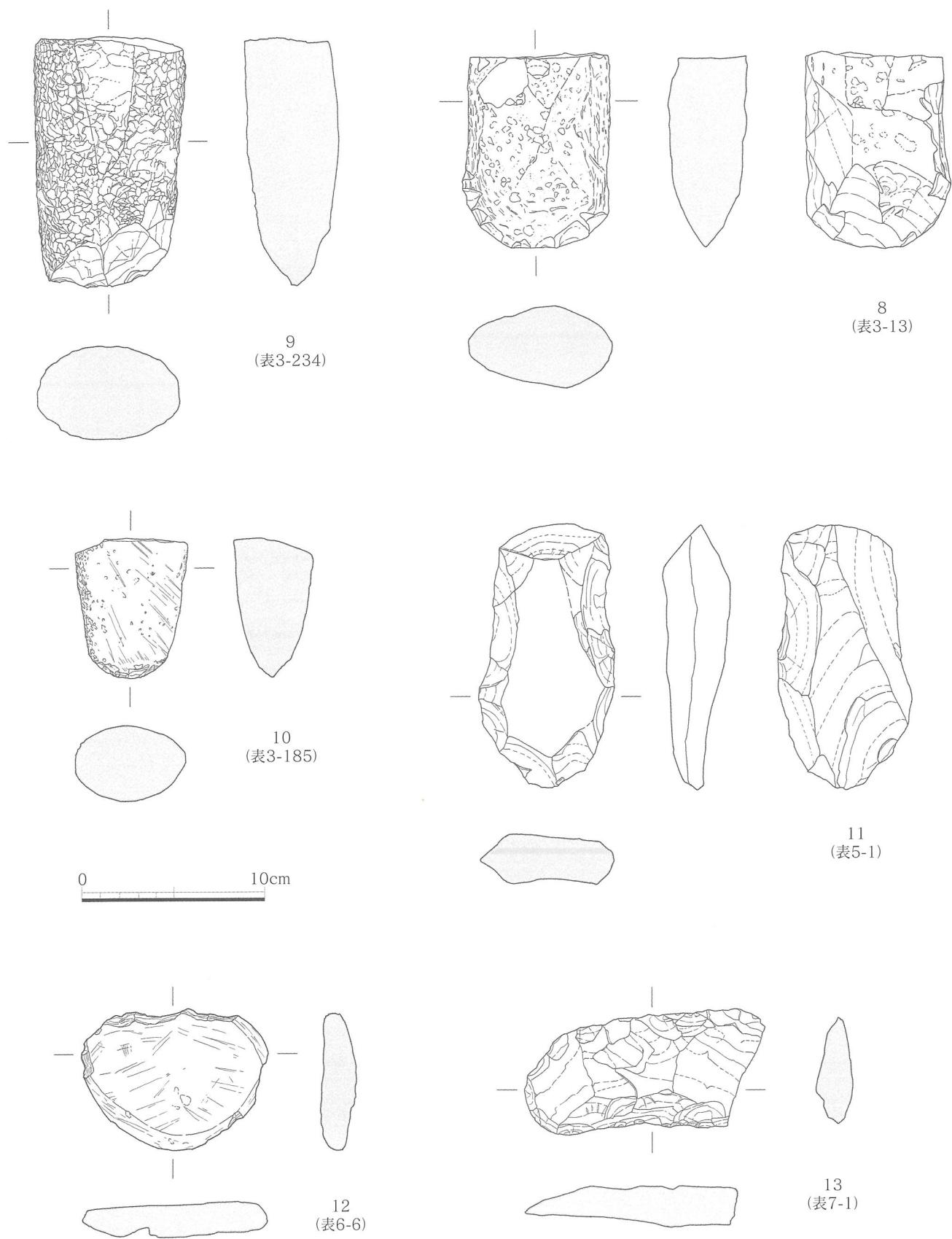
2
(表3-1)



第2図 上原氏採集資料1（石斧未製品）（S=1/3）



第3図 上原氏採集資料2 (石斧未製品) (S=1/3)



第4図 上原氏採集資料3 (石斧・打製石斧・石包丁・石鎌未製品) (S = 1/3)

南西部斜面で大量の剥片と共に採集されていることから、生産地の有力候補として、この付近を考えている。また、福岡市教育委員会による第8次調査地点（第1図中-20）においても打製石斧が出土した報告がある。残念ながら、上原氏採集資料の中には山頂部および南西斜面の出土例は無いが、南～南東部裾で出土した点では、第8次調査の傾向と一致する。それでは実際の遺物を見て行く。

第4図-11（表5-1）は大下F出土である。頭部が少し折れて失われているが、全体の形状はわかる。平面形態は刃部付近で撥形に広がり、先端はやや尖る。また、縦断面は少し反りを持つ。長さ14.4cm、幅7.3cm、厚さ3.7cm、重さ490g。製品は小型の打製石斧と考えられる。

5) 石包丁未製品

石包丁未製品は可能性のあるものも含めると、8点が確認されている。採集地点は不明のものを除くと、南東斜面の大下Fである。石材としてはほとんどが玄武岩だが、中には滑石系の石もある。

第4図-12（表6-6）は、滑石系の薄く平坦な円礫を利用した石包丁未製品と考えられる。一辺を打ち欠き、平面が三角形になるように加工を施している。また、表面から側面にかけては研磨痕も観察できた。裏面が大きく剥落しており、このため廃棄された可能性がある。長さ7.8cm、幅10.2cm、厚さ1.8cm、重さ220g。

6) 石鎌未製品

石鎌未製品は可能性のあるものを含めると8点が出土している。採集地点は、不明のものを除くと、熊野神社参道にあたる「お宮の南側下広場」や大下Fから出土しており、これらは今山の南側～南東側斜面にあたる。石材としてはいずれも玄武岩を使用している。

第4図-13（表7-1）は「お宮の南側下広場」での採集品である。全体に剥離が及んでおり側縁部から刃部にかけては調整剥離が施されている。途中で折損しており、このため廃棄された可能性が高い。長さ6.4cm、幅13.1cm、厚さ2.1cm、重さ250g。

7) 石錘

石錘は可能性のあるものを含め4点が採取されている。採集地点不明のものを除くと、大下Fの出土である。石材は玄武岩や滑石を使っている。

第5図-14（表8-1）は大下Fの採集品である。薄い玄武岩の円礫を利用し、上下左右それぞれの中央4カ所に打ち欠きを入れる。全体に薄い研磨痕が見られ、面を軽く整えたようすがうかがえる。長さ6.0cm、幅7.0cm、厚さ2.3cm、重さ160g。

8) 石戈・石剣

石戈は可能性のあるものを含めると2点、石剣は1点である。いずれも玄武岩製である。

第5図-15（表9-1）は大下Cの採集品である。形態から打製石斧の可能性もあるが、張り出し部分が戈の関部に近い曲線を描くことから、ここでは石戈の未製品とした。周縁部に調整剥離を施す段階で折れたようで、茎にあたる部分が失われている。長さ14.3cm、幅10.1cm、厚さ4.2cm、重さ570g。玄武岩製。

第5図-16（表9-3）は大下Fの採集品である。厚みは薄く、平面は長方形で、途中で折れる。片面に鎧状の稜線が通ることから石剣の未製品と考えた。長さ9.1cm、幅4.3cm、厚さ1.6cm、重さ100g。玄武岩製。

9) 砥石

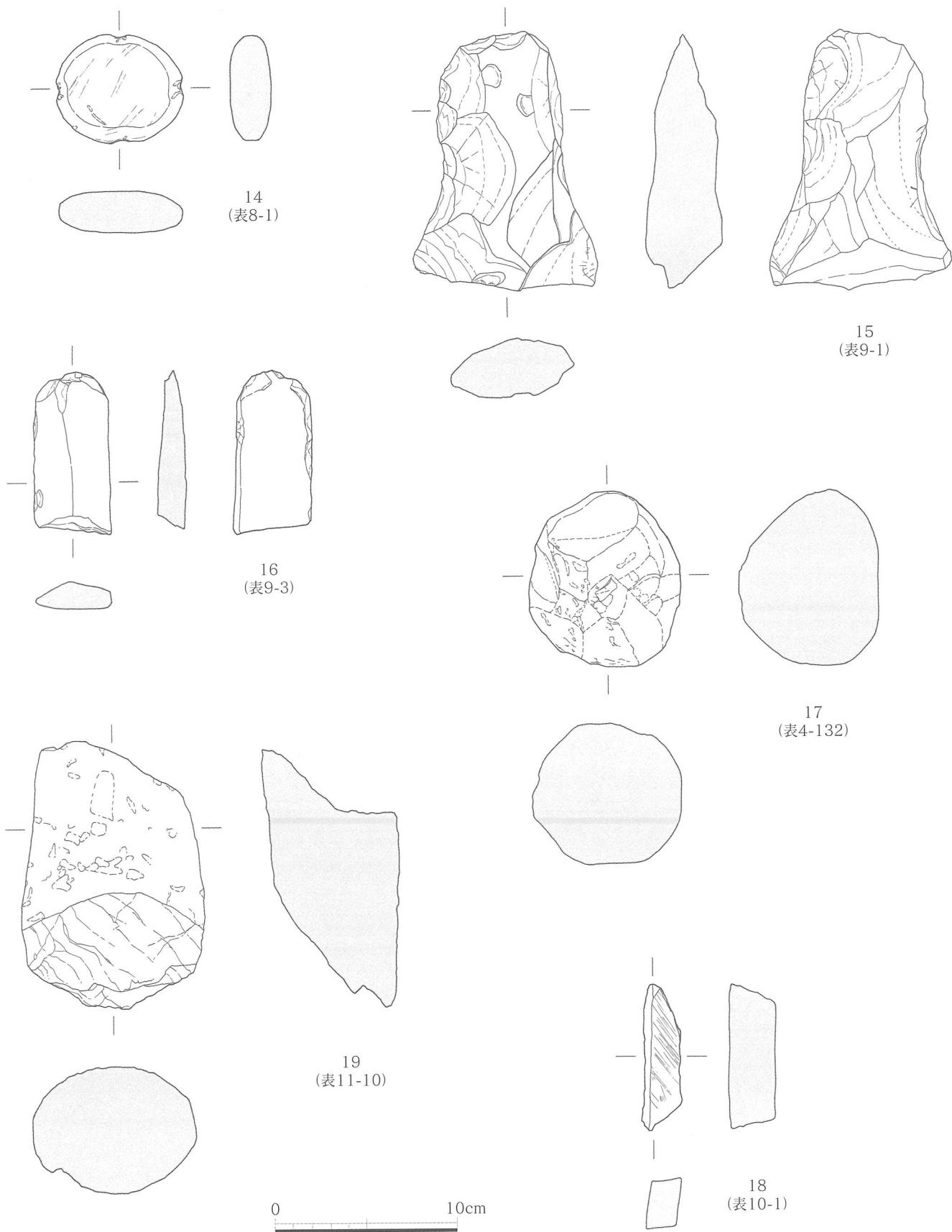
砥石は2点ほどある。いずれも小型品である。

第5図-18（表10-1）は大下FCD付近での採集品である。表裏の2面が砥石として使われており、他の面は剥落して失われている。表面には主に斜め方向の研磨痕、裏面には主に縦方向の研磨痕が残る。長さ8.0cm、幅2.1cm、厚さ2.7cm。頁岩製で、粒子は比較的細かく、仕上砥として使われた可能性がある。

10) その他の遺物

以上紹介した遺物のほかに、土器片や瓦片、剥片などがある。（表11）

第5図-19（表11-10）は用途不明の未製品で大下Fの採集品である。横断面が橢円形になり全体としては円筒形に近い形になるとされるが、上下両端部が折損し、失われているため、全



第5図 上原氏採集資料4 (石錘・石戈・石劍・叩石・砥石・用途不明未製品) (S = 1/3)

形を知ることができない。滑石系の石を使用しており、表面に敲打状の痕跡も確認できる。可能性としては大型の石錐も考えられる。長さ19.9cm、幅10.2cm、厚さ7.4cmで、重さは約1.38kg

12) 小結

以上、主な遺物について紹介を行ったが、当該資料の特徴としては、石斧や砥石など形態による判別が比較的容易なものを除き、未製品段階での製品予測が困難なものが多いことが挙げられる。中でも、叩石については使用痕がはつきりとしないものについては一覧表から除外した。その結果、上原氏の採集記録では石斧と叩石の数量にはほとんど差はなかった（P23、石斧約271点、叩石約264点）が、資料一覧（表3、表4）では両遺物に大きな差がついてしまった（石斧237点、叩石174点）。

また、基本的に採集品であるため、土器などが伴わず、正式な時期決定も難しい状態である。

当該資料の利用にあたっては、これらの点を課題として捉えて行く必要がある。

IV おわりに

上原氏の採集は、単に遺物を拾うのではなく、日付（時に時間の記述もある）、場所、遺物名、数量までの細かい記録を残している。また、「収集→洗浄→整理→保管」という一連の作業も行っており、近代的な調査手法を取り入れたものであったといえる。そして、収集にあたっては、工具である叩石にも焦点を当てるなど、石斧の生産活動に関わる遺物を広く収集しようとする姿勢が強く感じられる。

加えて、氏の採集記録は、昭和50～60年代にかけての今山遺跡における遺物の分布状況を物語る資料としても非常に興味が持てる。主なものを2点ほど上げると、まず1点目は、石器を中心とした遺物の散布範囲が挙げられる。氏の採集地点は山頂を含み、山の西側から南東側まで広がるが、そのほとんどが、南東の裾部に集中する。したがって、当時は今山の中でもこの付近に分布の中心があったといえるのではなかろうか。続いて2点目は、石斧未製品の残存状況がある。採集量全体から見た石斧未製品の比率は、圧倒的に多いとは

いえない。したがって、採集が行われた昭和50年代後半～60年代前半の時期には残りが良く、目立つ石斧は既に持ち去られていたことが想像できる。これに関連する出来事としては中山平次郎博士の記録（中山1931）に「石斧類はこれを見出すると人夫たちが珍重して皆持ち帰った」という記述があり、古くから収集の対象となっていたことが一つの要因といえるのかもしれない。

上原氏が自らの手で集めた資料および採集記録は今山遺跡における一級資料といえ、我々は後世に伝えていく責務を負わねばならないと思う。

＜謝辞＞

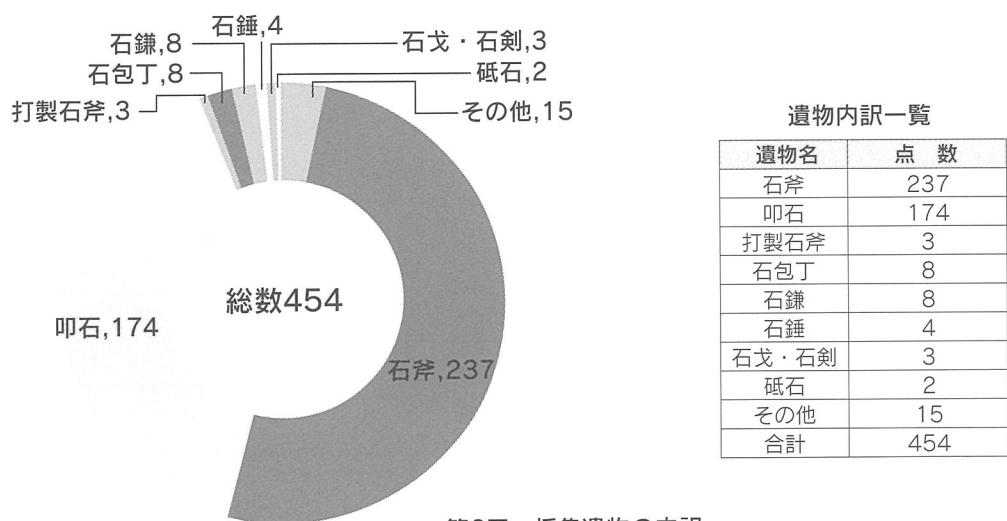
本稿の執筆にあたり、大内士郎氏に上原氏の収集資料や記録の提供および協力をいただいた。心から厚く御礼申し上げたい。

（表1文献）

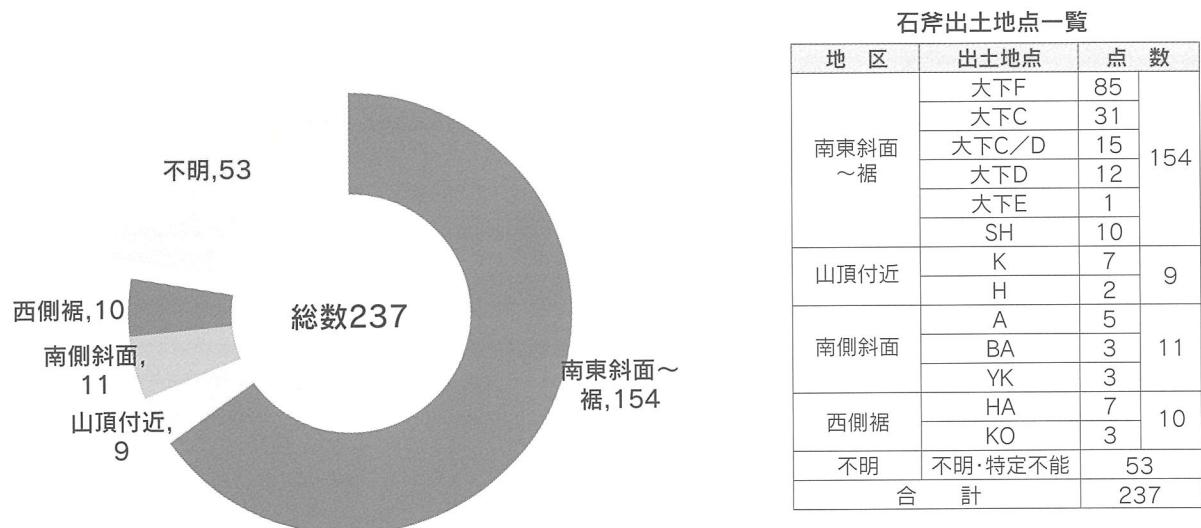
1. 中山平次郎 1931 「今山の石斧製造址」『史跡名勝天然記念物調査報告書 第6輯（史蹟の部）』（福岡県）
2. 下條信行 1968 『今山遺跡（1）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集（福岡市教育委員会）
3. 折尾学 1981 『今山・今宿遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集（福岡市教育委員会）
4. 福岡市教育委員会『今山遺跡確認調査図版』（発刊年等不明）
5. 米倉秀紀 1998 『今山遺跡 第7次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第584集（福岡市教育委員会）
6. 米倉秀紀 2005 『今山遺跡 第8次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集（福岡市教育委員会）

（参考文献）

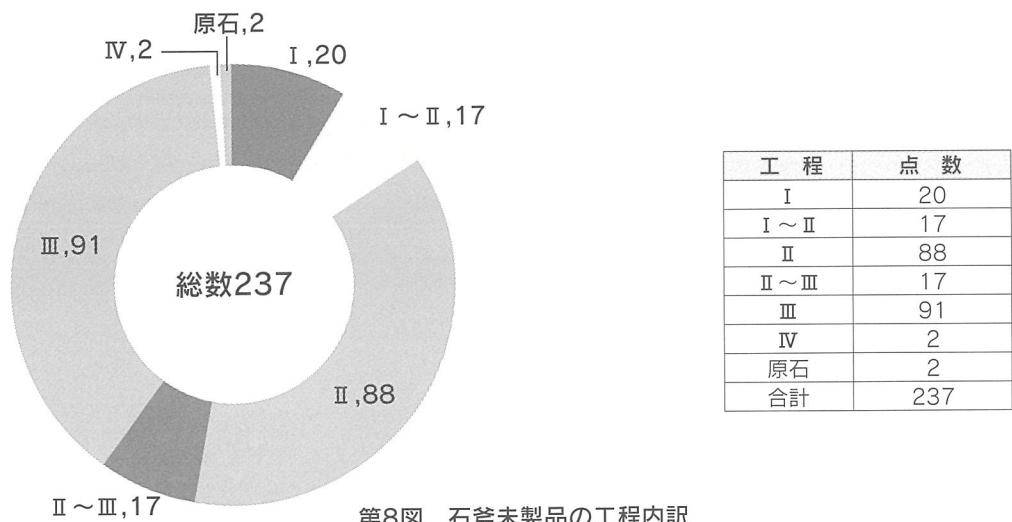
- 浜田昌治 1979 「今山遺跡第5、6地点発掘を終えて」『福岡考古懇話会々報』第10号（福岡考古懇話会）
- 柳田純孝 1985 「考古学講座資料 昭和59年度の発掘調査から」
- 吉留秀敏 1993 「縄文時代後期から晩期の石器技術総体の変化とその評価－早良平野を中心に」『古文化談叢』第30集（上）
- 大内士郎 1994 「今宿・今山遺跡及び周辺遺跡の表採資料」『今宿遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第389集（福岡市教育委員会）
- 山口譲治 1995 「北部九州の大陸系磨製石斧」『考古学ジャーナル』391
- 吉留秀敏 2005 「今山産玄武岩の利用とその変遷」『石器原産地研究会第7回研究会集会発表資料』



第6図 採集遺物の内訳



第7図 石斧未製品の出土地点の内訳



第8図 石斧未製品の工程内訳

表3

採集資料一覧 1 (石斧)

No	遺物名	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
1	石斧	大下F	22.4	12.1	8.7	3.41	完存	I ~ II	—	2図-2	
2	石斧	大下F	16.1	9	5.2	1.02	頭部~体部	II	—		
3	石斧	大下F	18.5	9.5	6.8	1.2	体部~刃部	II	—		
4	石斧	大下F	15	6.4	3.6	0.57	頭部~体部	II	—	3図-6	
5	石斧	大下F	15.6	11	4.7	1.14	頭部~体部?	I	—		
6	石斧	大下F	7.5	8.6	4.3	0.37	刃部	III	—		
7	石斧	大下F	15.6	7.4	4.7	0.73	頭部~刃部	II	—		
8	石斧	大下F	12.4	7.3	3.9	0.49	頭部~体部	II	—		
9	石斧	大下F	12.7	7.8	3.4	0.49	体部~刃部	II	—		裏面が大きく剥離
10	石斧	大下F	10.7	6.8	4.2	0.48	頭部~体部	II	—		
11	石斧	大下F	9	8.6	4.8	0.44	頭部	II	—		
12	石斧	大下F	7.6	6.8	3.4	0.23	刃部	III	—		
13	石斧	大下F	10.6	7.9	4.4	0.38	刃部	III	—	4図-8	
14	石斧	大下F	23.1	9.9	5.7	1.63	完存	II	—		裏面が大きく剥離
15	石斧	大下F	20	11	8.2	2.14	完存	I	—		
16	石斧?	大下F	7.3	5.7	4.3	0.24	頭部	III	—		屈曲、石鎌の先端か?
17	石斧	大下F	5.8	7.4	2.1	0.14	頭部	III	—		
18	石斧	大下F	8.1	6.7	4.3	0.33	体部	III	—		
19	石斧	大下F	11	8.3	4.3	0.53	頭部~体部	II	—		
20	石斧	大下F	21.5	11	5.4	1.71	完存	II	—		
21	石斧	大下F	13.4	8.7	6.3	1.18	体部~刃部	II	—		
22	石斧	大下F	16.5	8.6	6.5	1.5	体部~刃部	III	—		
23	石斧	大下F	10.4	7.7	4.5	0.62	体部~刃部	III	—		表面から両側面にかけて敲打
24	石斧	大下F	9.5	7.4	3.8	0.37	頭部~体部	II	—		
25	石斧	大下F	13.7	8	5.1	0.67	完存	II	—		
26	石斧	大下F	17.4	8.6	4.3	0.85	完存	II	—		
27	石斧	大下F	7.8	7.9	4	0.5	体部	III	—		両側面を敲打。表面の敲打痕少ない
28	石斧	大下F	8.6	5.8	2.3	0.18	体部~刃部	II	—		
29	石斧	大下F	14.7	6.8	4.3	0.7	頭部~体部	III	—		表面敲打。側面敲打少ない。裏面敲打なし
30	石斧	大下F	12.4	7	4.9	0.71	体部~刃部	III	—		側面に敲打痕若干あり
31	石斧	大下F	12.8	8.4	6.8	1.1	頭部~体部	III	—		側面に敲打痕あり
32	石斧	大下F	13.1	8.9	6.2	0.95	頭部~体部	II	—		
33	石斧	大下F	15.3	8.8	4.3	0.85	頭部~体部	III	—		表面敲打。側面敲打少ない。裏面敲打なし。頭部が平坦で長方形状の平面形態を呈し、身が薄い
34	石斧	大下F	17.8	12.4	5.8	1.52	完存	I	—		
35	石斧	大下F	12.7	9.8	4.8	0.81	体部~刃部	II	—		
36	石斧	大下F	17.1	5.8	4.7	0.51	完存	III	—	3図-7	若干の敲打痕あり。中型自然の転石か?
37	石斧	大下F	32	8.1	4.4	1.86	完存	—	—		
38	石斧	大下F	18.7	8.9	5.9	1.38	頭部~体部	III	—		表面のみ敲打痕若干あり。両側面から裏面にかけては敲打なし
39	石斧	大下F	8.5	8.5	5	0.44	刃部	III	—		表面のみ敲打痕あり。両側面から裏面にかけては敲打なし
40	石斧	大下F	21.6	10.2	7	1.96	完存	I ~ II	—		裏面に大きな抉れ有り
41	石斧	大下F	16.5	8.7	6.6	1.34	体部	III	—		一側面から表裏両面に向かって敲打。表裏両面の半分程度まで敲打痕が残る
42	石斧	大下F	11.6	8.9	6.2	0.98	体部~刃部	III	—		一側面に敲打痕残る
43	石斧	大下F	14.4	9.8	6.5	1.24	体部~刃部	II	○		裏面の一部に自然面残る
44	石斧	大下F	12.5	7.4	5.7	0.9	頭部~体部	III	—		全面に敲打痕残る
45	石斧	大下F	10.9	8.8	4.7	0.67	体部	I	—		
46	石斧	大下F	9.5	7.7	4.8	0.62	体部~刃部	III	—		両側面に敲打痕若干あり
47	石斧	大下F	6.9	8.4	4.1	0.34	刃部	II	—		
48	石斧	大下F	15.4	7.6	2.9	0.55	ほぼ完存	II	—		
49	石斧	大下F	10.6	7.2	2.2	0.27	頭部	II	—		剥片か?
50	石斧	大下F	22.2	9.9	7.6	1.96	完存	II	—		
51	石斧	大下F	17.5	12.5	5.7	1.27	完存	I	—		
52	石斧	大下F	14.8	9.2	7.8	1.64	頭部~体部	III	—		両側面敲打
53	石斧	大下F	12.9	9.3	6.7	1.31	頭部~体部	III	—		一側面敲打
54	石斧	大下F	13.4	7.8	4	0.67	頭部~体部	II	—		
55	石斧	大下F	9.2	7.5	3.5	0.41	頭部~体部	II	—		
56	石斧	大下F	10.1	8.3	4.6	0.7	頭部~体部	II	—		やや屈曲する
57	石斧	大下F	17.6	10.4	5.4	1.39	体部	I ~ II	—		
58	石斧	大下F	11.2	6.5	5	0.56	頭部~体部	II	—		
59	石斧	大下F	14.6	8.1	5.3	0.7	体部~刃部	II	—		扁平
60	石斧	大下F	16.5	9.7	6.3	1.51	頭部~体部	II	—		

No	遺物名	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
61	石斧	大下F	18.6	8.7	6.9	1.42	体部～刃部	II	—		
62	石斧	大下F	11	7.1	4.7	0.56	体部～刃部	III	—		裏面の一部を除いてほぼ全面に敲打痕あり
63	石斧	大下F	10.4	7.1	4.6	0.52	体部～刃部	II	—		
64	石斧	大下F	6.4	7.4	4	0.25	頭部	III	—		
65	石斧	大下F	8.1	7.1	4.3	0.34	刃部	III	—		表裏面に敲打痕有るが、側面にはほとんど見られない
66	石斧	大下F	8.8	7.7	4.9	0.52	刃部	II	—		
67	石斧	大下F	7.4	6.7	4.8	0.39	頭部	III	—		全面に敲打痕あり
68	石斧	大下F	18.4	7.6	4.7	0.9	完存	II	—		
69	石斧	大下F	11.8	7.3	4.9	0.7	体部～刃部	III	—		全面に敲打痕あり
70	石斧	大下F	10.8	6.9	4.9	0.64	体部～刃部	III	—		裏面の中央一部を除き、表面から両側面にかけて敲打痕あり
71	石斧	大下F	8.1	5.4	3.1	0.21	体部～刃部	III	—		
72	石斧	大下F	7.9	6.7	3.3	0.23	体部～刃部	III	—		
73	石斧	大下F	11.3	6.3	3.5	0.41	体部～刃部	II～III	—		平面形態が長方形で扁平
74	石斧	大下F	17.4	8.1	7.3	1.46	体部～刃部？	III	—		一側面に敲打痕顕著にあり
75	石斧	大下F	9.1	8.1	5.9	0.73	体部	III	—		表面に敲打痕有り。両側面から裏面にかけては少ない
76	石斧	大下F	10.9	9.3	4.5	0.7	体部～刃部	III	—		表裏両面に敲打痕。側面は少ない
77	石斧	大下F	8.6	8	4.7	0.48	頭部	III	—		表面に敲打痕有り。両側面から裏面にかけては少ない。頭部は平坦に作り出し、方形に近い平面形態
78	石斧	大下F	7.5	7.9	4.3	0.49	頭部	III	—		一側面に敲打痕あり
79	石斧	大下F	4.5	8.6	5.2	0.41	体部	III	—		一側面を除き、3面に敲打痕あり
80	石斧	大下F	16.8	6.1	4	0.52	完存	II	—	3図-4	体部がやや湾曲する
81	石斧	大下F	19.2	13.2	6.4	1.91	完存	I	—	2図-1	
82	石斧	大下F	11.7	7.7	3.2	0.45	頭部？～体部	I	—		
83	石斧？	大下F	37.2	8.3	7.9	3.22	完存	—	○		片岩系の原石か。 「※3.26 猛上畠」の注記有り
84	石斧	大下F?	13.6	7.5	5.3	0.85	頭部～体部	II	—		
85	石斧	大下F?	9.2	4.9	2.9	0.26	頭部～体部	III	—		
86	石斧	大下C	13.8	8.6	5.3	0.72	体部～刃部	II	—		
87	石斧	大下C	14.9	8.3	3.5	0.59	体部	II	—		
88	石斧	大下C	19.7	10	6.5	1.24	体部～刃部	I～II	—		
89	石斧	大下C	17.3	9.1	5.5	1.12	完存	II	—		
90	石斧	大下C	12.9	8.7	7.1	1.32	体部～刃部	II	—		
91	石斧	大下C	12	7.8	5.4	0.5	頭部～体部	II	—		頭部を平坦に作り出す。 平面が長方形状
92	石斧	大下C	13.9	6.9	3.6	0.49	体部～刃部？	II	—		
93	石斧	大下C	18.1	8.6	4.6	1.06	完存	II	—		
94	石斧	大下C	15.3	7.4	5.3	0.92	完存	I	○		打裂の痕跡少ない。転石か？
95	石斧	大下C	15.7	8.1	5.6	0.88	完存	I～II	—		D字形に一側面が湾曲する
96	石斧	大下C	14.7	7.4	3.7	0.62	ほぼ完存（頭部の一部欠失）	II	—		小型扁平
97	石斧	大下C	11.3	8.1	4.3	0.63	体部	II	—		裏面大きく剥離。表面の中央一部に敲打痕あり
98	石斧	大下C	12.2	5.9	3.1	0.3	完存	I～II	—		小型扁平
99	石斧	大下C	9.5	7.4	3.9	0.42	頭部～体部	II	—		頭部を平坦に作り出す。 平面が長方形状
100	石斧	大下C	12.1	6.4	4.7	0.55	体部～刃部	III	—		両側面の敲打痕が頗著
101	石斧	大下C	13.7	7.3	5.8	0.99	頭部～体部	III	—		全面敲打
102	石斧	大下C	16.7	8.1	6.3	1.34	体部～刃部	III	—		両側面の敲打痕が頗著
103	石斧	大下C	13.8	7.4	5.7	0.91	頭部？～体部	III	—		ほぼ全面に敲打痕あり
104	石斧	大下C	11.1	7.5	5.2	0.63	頭部～体部	III	—		表面から両側面にかけて敲打
105	石斧	大下C	7.8	5.2	2.3	0.14	体部～刃部	II	—	3図-5	小型扁平。刃部を円く作り出す
106	石斧	大下C	12.7	7.2	6	0.82	体部～刃部	III	—		一側面に若干の敲打痕あり
107	石斧	大下C	12.3	8.5	4.7	0.61	頭部？～体部	II	—		一側面から表裏両面に向って敲打
108	石斧	大下C	10.6	8.2	5.6	0.76	頭部？～体部	III	—		

No	遺物名	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
109	石斧	大下C	11.3	6.2	4.6	0.52	頭部～体部	III	—		両側面から表裏面に向って敲打途中
110	石斧	大下C	8.3	9	4.7	0.6	体部	II～III	—		敲打痕がわずかに見られる
111	石斧	大下C	5.7	6.5	3.3	0.21	刃部	II～III	—		敲打痕がわずかに見られる
112	石斧	大下C	12.1	8	5.3	0.64	頭部～体部	II～III	—		両側面に若干の敲打痕あり
113	石斧	大下C	13.9	8	3.9	0.66	完存	II	—		小型
114	石斧	大下C	10.1	7.8	4.3	0.49	体部～刃部	III	—		刃部を丁寧に作り出す。表面から両側面に向って敲打痕あり
115	石斧	大下C	8.9	6.5	4.9	0.43	体部	III	—		上下両端および一側面方向が大きく欠損
116	石斧	大下C	11	6.9	3.6	0.39	頭部～体部	II	—		
117	石斧	大下D	15.3	7.2	7.2	1.21	体部～刃部	III	—		両側面から表裏両面に向って敲打
118	石斧	大下D	7.8	6.6	5.6	0.46	頭部	III	—		頭部を平坦に作り出す
119	石斧	大下D	11.4	8.4	5.1	0.67	頭部～体部	III	—		表裏両面中央の平坦部に敲打痕あり
120	石斧	大下D	9.6	7.3	5.7	0.53	頭部～体部	III	—		表面に敲打痕あり
121	石斧	大下D	9.2	6.5	4.9	0.46	体部～刃部	III	—		表面に敲打痕、裏面に剥離痕あり
122	石斧	大下D	17	7.5	4.6	0.83	体部～刃部	II	—		
123	石斧	大下D	16.1	6.6	2.5	0.36	完存	II	—		
124	石斧	大下D	8.2	5.1	3.7	0.26	体部～刃部	III	—		両側面に敲打痕あり
125	石斧	大下D	15.9	9.4	5.5	1.18	完存	I	—		
126	石斧	大下D	10.8	7.4	4.3	0.62	体部	III	—		ほぼ全面に敲打痕あり
127	石斧	大下D	12.9	7.5	6.2	0.83	体部～刃部	III	—		ほぼ全面に敲打痕あり
128	石斧	大下D	18.2	8	5.1	1.14	完存	II	—		
129	石斧	大下C/D	14.6	9.2	3.6	0.73	完存	I	—		薄いが両面に調整の痕跡あり
130	石斧	大下C/D	13.2	11.3	4.6	0.79	完存	I	—		小型石斧の打裂段階か？小型
131	石斧	大下C/D	13.6	8.2	5.6	1.01	体部～刃部	III	—		全面に敲打を施す
132	石斧	大下C/D	12.6	7.9	5.3	0.61	体部～刃部？	III	—		側面に若干の敲打痕あり
133	石斧	大下C/D	11.4	7.9	3.6	0.5	体部～刃部	II	—		側面～刃部にかけて敲打痕あり。薄い
134	石斧	大下C/D	17.1	11.1	6.4	1.51	完存	I	—		
135	石斧	大下C/D	18.2	9.1	7.2	1.73	体部～刃部	III	—		一側面に敲打痕あり
136	石斧	大下C/D	17.5	10.6	6.5	1.29	完存	I	—		
137	石斧	大下C/D	12.5	9.9	5.1	0.74	完存	I	—		
138	石斧	大下C/D	11.1	6.5	4.1	0.52	体部～刃部	III	—		粗磨きの可能性あり。刃部の一部が欠けているため、使用した可能性ありか？
139	石斧	大下C/D	8.9	8.2	5.3	0.52	刃部	III	—		一側面を除き、3面に敲打痕あり
140	石斧	大下C/D	11.3	8.6	5.7	0.72	体部～刃部	III	—		池の注記（池松か？）表裏面に敲打痕あり
141	石斧	大下C/D	11.8	7.2	5.1	0.56	体部～刃部	III	—		若干の敲打痕あり
142	石斧	大下C/D	7.7	7.1	3.5	0.28	頭部	II	—		裏面大きく剥離
143	石斧	大下C/D	8	7.5	4.6	0.43	刃部	III	—		表面に敲打痕あり。裏面は剥離か？
144	石斧	大下E	10.9	6.2	2.8	0.3	頭部～体部	II	—		
145	石斧	SH	10.9	6.7	3.6	0.42	頭部～体部	II	—		
146	石斧	SH	9.4	5.9	3.2	0.22	頭部～体部	II	—		
147	石斧	SH	15	8.7	6.1	1.16	刃部～体部	II～III	—		
148	石斧	SH	13.3	8.6	6.8	1.04	頭部～体部	II	—		
149	石斧	SH	12.7	8	4.6	0.58	刃部～体部	II	—		
150	石斧	SH	10.7	7.3	2.7	0.42	刃部～体部	III	—		
151	石斧	SH	9.7	7.4	4.6	0.48	頭部～体部	III	—		
152	石斧	SH	13.6	8.2	4.6	0.62	体部	II	—		
153	石斧	SH	10.2	6.3	3.9	0.32	刃部～体部	III	—		
154	石斧	SH	13.7	8.8	4.1	0.58	刃部～体部	II	—		
155	石斧	K	18.6	7.3	4.7	0.81	完存	II	—		
156	石斧	K	20.7	9.4	4.5	1.28	完存	II	—		薄い
157	石斧	K	15.8	10	4.9	1.13	完存	I	—		
158	石斧	K	15.2	6	6.3	0.97	体部～刃部	II～III	—		敲打状の痕跡が薄らと観察できる。柱状
159	石斧	K	12.3	8.2	5.5	0.8	体部～刃部	III	—		若干の敲打痕あり
160	石斧	K	18.8	7.2	3.7	0.65	完存	I	—		表裏両面とも剥離。剥片の可能性大
161	石斧	K	12.5	8.6	3.4	0.62	体部～刃部	II	—		薄い

No	遺物名	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
162	石斧	BA	10.5	9.3	5.4	0.57	刃部?	II	—		
163	石斧	BA	20.2	11.4	5.6	1.42	完存	I	—		
164	石斧	BA	18.2	16.5	6	2.1	完存	I	○		
165	石斧	YK	13	7.3	4.4	0.77	頭部~体部	III	—		
166	石斧	YK	12.2	8.2	5.6	0.78	頭部~体部	II~III	—		
167	石斧	YK	15.2	8.3	5.8	1.28	完存	II~III	—		
168	石斧	H	22.9	9.2	5.1	1.44	完存	II	—		169と同じ調整段階。 大きさ、形態も似る
169	石斧	H	22.4	9.5	6.7	1.58	完存	II	○	3図-3	刃部の一部に原礫面
170	石斧	A	10.6	9.1	3.9	0.53	刃部	III	—		裏面大きく剥離
171	石斧	A	16.8	7.2	4.9	0.81	完存	II~III	—		表裏両面大きく剥離
172	石斧	A	14.9	8.8	5.7	1.13	頭部?~体部	II	—		
173	石斧	A	8.9	6.3	4.4	0.32	体部~刃部	II	—		
174	石斧	A	20.7	8.5	3.3	0.67	体部	III	—		裏面大きく剥離。側面 敲打中に剥離か。
175	石斧	KO	12.5	8	7	0.95	刃部~体部	III	—		
176	石斧	KO	16.9	11	7.2	1.71	刃部~体部	I~II	—		
177	石斧	KO	20.8	9.2	6.9	1.85	ほぼ完存	II~III	—		
178	石斧	HA	18.6	15.4	6.9	1.72	完存	I	—		
179	石斧	HA	24.7	11.2	7.5	2.84	完存	II	—		
180	石斧	HA	19.3	8.4	6	1.45	完存	II	—		
181	石斧	HA	16.3	9.7	6.7	1.47	ほぼ完存	II~III	—		
182	石斧	HA	20.8	11.8	5.6	1.8	刃部~体部	II	—		
183	石斧	HA	22	8.8	6.1	1.45	ほぼ完存	II	—		
184	石斧	HA	6.3	6.6	4.6	0.27	頭部	III	—		
185	石斧	茂氏宅前 (特定できず)	7.6	6	4.3	0.29	刃部	IV		4図-10	茂氏宅前と注記あり。 研磨の途中に折損か?
186	石斧	不明	13.7	8.2	5.4	0.87	完存	I~II	—		
187	石斧	不明	14.8	8	5.5	1.03	刃部~体部	II~III	—		
188	石斧	不明	17.5	8.5	5.2	0.84	完存	I~II	—		
189	石斧	不明	14	8.6	4	0.76	完存	I	—		
190	石斧	不明	14.5	8.2	4.5	0.82	刃部~体部	II	—		
191	石斧	不明	17.6	10.7	6.3	1.73	頭部~体部	II	—		
192	石斧	不明	14	10.6	5.6	1.55	ほぼ完存	II	—		
193	石斧	不明	11.8	9.5	5.3	0.92	刃部~体部	II~III	—		
194	石斧	不明	16.9	7	4.6	0.8	完存	III	—		
195	石斧	不明	9.3	7.7	2.3	0.26	体部	II	—		
196	石斧	不明	15.4	10.8	5.8	1.14	完存	I~II	—		
197	石斧	不明	22.5	7.5	5.5	1.08	完存	II	—		
198	石斧	不明	7	6.3	2.1	0.14	刃部~体部	II~III	—		
199	石斧	不明	15.7	10.3	4.4	1.02	体部	I~II	—		
200	石斧	不明	12.2	7.8	5.7	0.81	頭部~体部	III	—		
201	石斧	不明	11.4	9	3.5	0.47	刃部	III	—		
202	石斧	不明	15.3	8.8	3.5	0.61	完存	II	—		
203	石斧	不明	12	8	4.9	0.7	刃部~体部	III	—		
204	石斧	不明	16	10.2	3.4	0.78	完存	I~II	○		
205	石斧	不明	11.5	7.6	3.7	0.46	刃部~体部	II	—		
206	石斧	不明	9.6	7.3	2.6	0.28	刃部	II	—		
207	石斧	不明	9.4	7.3	4.2	0.49	頭部	III	—		
208	石斧	不明	18.3	8.5	5.7	1.32	完存	II	—		
209	石斧	不明	10.3	7	4.6	0.54	刃部	III	—		
210	石斧	不明	18	7.8	3.5	0.8	完存	I~II	○		
211	石斧	不明	8.7	7	2.4	0.26	体部	II	—		
212	石斧	不明	21.5	8	6	1.5	ほぼ完存	II	—		
213	石斧	不明	22	9.5	4.4	1.28	ほぼ完存	II	—		
214	石斧	不明	13.5	7	4	0.59	完存	II~III	—		小型石斧
215	石斧	不明	12.7	7.3	5.2	0.64	刃部~体部	III	—		
216	石斧	不明	24	6.1	2.9	0.66	完存	II	—		
217	石斧	不明	10.6	5	3	0.23	完存	II	—		小型の扁平片刃石斧
218	石斧	不明	16.5	11	4.1	1.69	ほぼ完存	I~II	—		
219	石斧	不明	15.3	3.5	2.8	0.28	完存	III	—		小型の棒状の石斧か
220	石斧	不明	13	7.2	4.3	0.5	体部	II~III	—		
221	石斧	不明	15.2	7	3.6	0.37	完存	II	—		
222	石斧	不明	10.2	8.5	4.5	0.59	頭部	III	—		
223	石斧	不明	9.7	7.7	4.7	0.5	体部	III	—		
224	石斧	不明	20.5	8	6.6	1.82	完存	III	—		
225	石斧	不明	18.5	11	5.5	1.31	ほぼ完存	I~II	—		
226	石斧	不明	20	9	5.1	1.3	完存	II~III	—		
227	石斧	不明	16	7	5.2	0.79	完存	III	—		
228	石斧	不明	10.8	7	4	0.47	刃部~体部	III	—		
229	石斧	不明	13	8.5	5.6	0.82	頭部~体部	III	—		
230	石斧	不明	13.3	8	4.4	0.73	頭部~体部	III	—		
231	石斧	不明	10.3	8.4	5.5	0.68	頭部~体部	III	—		
232	石斧	不明	12.8	7.1	4.7	0.78	刃部~体部	IV	—		研磨の途中

No	遺物名	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
233	石斧	不明	13	7.4	6.3	0.92	刃部～体部	III	—		
234	石斧	不明	8.7	8.2	5	1	刃部～体部	III	—	4図-9	
235	石斧？	不明	9.8	7	3.6	0.34	体部	I～II	—		
236	石斧？	不明	10.6	8.6	5.7	0.6	完存	I～II	—		小型石斧か
237	石斧？	不明	11.5	8.2	4.7	0.59	完存	III	—		

※表の備考に石材の記載がない石器は玄武岩製

表4

採集資料一覧 2 (叩石)

No	遺物名	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
1	叩石	大下F	6.4	5.7	3.7	0.26	完存	—	—		片岩系か。方形
2	叩石	大下F	10	8.8	6.9	0.9	完存	—	—		片岩系か。円形
3	叩石	大下F	6.1	5.6	3.6	0.2	完存	—	—		片岩系か。円形
4	叩石	大下F	6.8	5.5	5.2	0.35	完存	—	—		片岩系か。方形
5	叩石	大下F	6.3	5.9	4.7	0.27	完存	—	—		片岩系か。円形
6	叩石	大下F	5.8	3.8	3	0.1	完存	—	—		玄武岩。楕円形
7	叩石	大下F	8.6	6.6	3.6	0.29	約2分の1	—	—		片岩系か。楕円形
8	叩石	大下F	6.2	6.2	3.7	0.22	約2分の1	—	—		流紋岩系。台形
9	叩石	大下F	5.5	5	4.1	0.2	完存	—	—		片岩系か。方形
10	叩石	大下F	6.8	5.5	5.3	0.34	完存	—	—		片岩系か。台形
11	叩石	大下F	6.4	5.7	5	0.3	完存	—	—		片岩系か。円形
12	叩石	大下F	8.1	6.8	2.7	0.25	約3分の1	—	—		片岩系か。楕円形
13	叩石	大下F	9.1	6.7	3.7	0.32	完存	—	—		片岩系か。三角形
14	叩石	大下F	6.6	5.6	2.5	0.13	約3分の1	—	—		流紋岩系。円形
15	叩石	大下F	6.7	6.6	2.7	0.16	約3分の1	—	—		流紋岩系。円形
16	叩石	大下F	7.3	5.6	3.7	0.22	約2分の1	—	—		片岩系か。三角形
17	叩石	大下F	6	4.7	5.1	0.23	完存	—	—		片岩系か。方形
18	叩石	大下F	8.7	8	3.8	0.47	完存	—	—		片岩系か。円形
19	叩石	大下F	6.6	4.5	3.8	0.18	完存	—	—		片岩系か。楕円形
20	叩石	大下F	6.1	5.4	3.3	0.2	完存	—	—		片岩系か。円形
21	叩石	大下F	7.2	6.8	5.3	0.37	完存	—	—		片岩系か。円形
22	叩石	大下F	7.4	6.6	4.3	0.26	約2分の1	—	—		片岩系か。円形
23	叩石	大下F	6.7	5.8	3.4	0.23	完存	—	—		片岩系か。楕円形
24	叩石	大下F	9.2	6.8	6	0.57	完存	—	—		片岩系か。方形
25	叩石	大下F	8.1	7.1	3.1	0.26	完存	—	—		片岩系。円形
26	叩石	大下F	6.5	5.4	2.7	0.12	約3分の1	—	—		片岩系か。円形
27	叩石	大下F	7.4	6.4	4.2	0.35	完存	—	—		片岩系か。方形
28	叩石	大下F	7.8	6.3	3.7	0.25	完存	—	—		片岩系か。楕円形
29	叩石	大下F	7.2	6.8	5.5	0.45	完存	—	—		玄武岩。円形
30	叩石	大下F	6.3	6	5.6	0.36	完存	—	—		流紋岩系。円形
31	叩石	大下F	7.2	6.6	6.3	0.45	完存	—	—		片岩系か。円形
32	叩石	大下F	6.3	6.2	4.8	0.33	完存	—	—		片岩系か。円形
33	叩石	大下F	7.8	3.5	2.9	0.13	完存	—	—		玄武岩。棒状
34	叩石	大下F	6.8	6.8	5.9	0.44	完存	—	—		片岩系か。円形
35	叩石	大下F	6	4.7	4.4	0.2	完存	—	—		片岩系か。円形
36	叩石	大下F	6.7	6.2	6.5	0.36	完存	—	—		片岩系か。方形
37	叩石	大下F	6.5	6.2	4.6	0.33	完存	—	—		片岩系か。円形
38	叩石	大下F	5.7	6	4.2	0.25	完存	—	—		片岩系か。台形
39	叩石	大下F	7.3	6.9	5	0.39	約2分の1	—	—		片岩系か。三角形
40	叩石	大下F	7.7	6	3.6	0.28	完存	—	—		片岩系か。楕円形
41	叩石	大下F	7.6	5.8	3.3	0.23	完存	—	—		片岩系か。長方形
42	叩石	大下F	7.7	5.7	4.1	0.31	完存	—	—		流紋岩系。楕円形
43	叩石	大下F	7	6.9	5.4	0.4	完存	—	—		片岩系か。円形
44	叩石	大下F	7.1	5.7	6	0.41	完存	—	—		片岩系か。円形
45	叩石	大下F	6.4	5	4.7	0.24	完存	—	—		片岩系か。円形
46	叩石	大下F	6	5.1	3.6	0.21	完存	—	—		片岩系か。方形
47	叩石	大下F	7.6	6.4	3.7	0.38	完存	—	—		片岩系か。円形
48	叩石	大下F	6.4	5.6	4.2	0.25	完存	—	—		片岩系か。円形
49	叩石	大下F	7.4	5.7	3.1	0.22	完存	—	—		片岩系か。楕円形
50	叩石	大下F	7	7	4.4	0.36	完存	—	—		片岩系か。台形
51	叩石	大下F	6.2	5.1	3.8	0.2	完存	—	—		片岩系。楕円形
52	叩石	大下F	7.5	7.2	6.2	0.5	完存	—	—		片岩系か。円形
53	叩石	大下F	7.6	7.2	7	0.72	完存	—	—		片岩系か。円形
54	叩石	大下F	7.2	6.5	5.6	0.46	完存	—	—		片岩系か。円形
55	叩石	大下F	6.9	5.8	3.7	0.24	完存	—	—		片岩系か。円形
56	叩石	大下F	7	5.5	4.7	0.28	完存	—	—		片岩系か。台形
57	叩石	大下F	10.7	6.2	3	0.34	完存	—	—		片岩系か。楕円形
58	叩石	大下F	8.6	8.4	6.7	0.84	完存	—	—		玄武岩。円形
59	叩石	大下F	5.7	5.5	5.2	0.26	完存	—	—		玄武岩。円形
60	叩石	大下F	6.7	4.2	2.8	0.13	約2分の1	—	—		花崗岩。棒状
61	叩石	大下F	7	6.9	3.5	0.26	完存	—	—		片岩系か。円形
62	叩石	大下F	5.6	4.6	1.8	0.06	完存	—	—		玄武岩。円形
63	叩石	大下F	8.3	6.7	5.3	0.48	完存	—	—		片岩系か。台形
64	叩石	大下F	7.1	6.6	4.2	0.35	完存	—	—		片岩系か。台形

No	遺物名	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
65	叩石	大下F	6.7	6.6	5.6	0.43	完存	—	—		流紋岩系。円形
66	叩石	大下F	7.7	6.7	5.7	0.42	完存	—	—		片岩系か。三角形
67	叩石	大下F	5.7	5.7	2.8	0.17	完存	—	—		片岩系か。円形
68	叩石	大下F	8.8	7.3	3.4	0.37	完存	—	—		片岩系か。円形
69	叩石	大下F	7.2	6.8	3.8	0.26	完存	—	—		片岩系か。円形
70	叩石	大下C	7.5	7.2	3.3	0.28	完存	—	—		片岩系か。円形
71	叩石	大下D	6.8	5.8	5.4	0.35	完存	—	—		片岩系か。円形
72	叩石	大下D	9.2	7.1	7.1	0.72	完存	—	—		片岩系か。円形
73	叩石	大下F	6.1	5.2	5.4	0.23	約3分の2	—	—		片岩系か。円形
74	叩石	大下D	5.7	5.4	5.1	0.2	完存	—	—		片岩系か。三角形
75	叩石	大下F	6.3	5.1	3.6	0.18	完存	—	—		玄武岩。円形
76	叩石	大下F	6.6	6.4	4.4	0.3	完存	—	—		片岩系か。円形
77	叩石	大下F	7	7	6.3	0.58	完存	—	—		片岩系か。円形
78	叩石	大下F	6.6	6.5	5.1	0.36	完存	—	—		片岩系か。円形
79	叩石	大下F	7.6	5	3.5	0.29	完存	—	—		片岩系か。長方形
80	叩石	大下F	6.3	4.7	5.2	0.26	完存	—	—		片岩系か。円形
81	叩石	大下F	7.7	6.5	5.6	0.36	完存	—	—		玄武岩。円形
82	叩石	大下F	6	5	2.7	0.11	完存	—	—		流紋岩系。円形
83	叩石	大下F	6.3	6.1	4	0.26	完存	—	—		片岩系か。円形
84	叩石	大下F	7.2	6.2	4.7	0.3	完存	—	—		片岩系か。円形
85	叩石	大下F	6.4	5.4	4.1	0.22	完存	—	—		片岩系か。円形
86	叩石	大下F	6.7	6.5	5.1	0.38	完存	—	—		片岩系か。円形
87	叩石	大下F	8.8	7.6	5.3	0.46	完存	—	—		片岩系か。三角形
88	叩石	大下F	6.6	5.1	3.6	0.26	完存	—	—		片岩系か。長方形
89	叩石	大下F	6.5	6.2	4.1	0.31	完存	—	—		片岩系か。長方形
90	叩石	大下F	7.8	7.3	5.9	0.55	完存	—	—		片岩系か。円形
91	叩石	大下F	6.9	6.3	6.1	0.45	完存	—	—		片岩系か。円形
92	叩石	大下F	6.6	5.6	3.7	0.23	完存	—	—		片岩系か。円形
93	叩石	大下F	7.4	6.6	4.3	0.32	完存	—	—		片岩系か。円形
94	叩石	大下F	5.9	5.6	4.3	0.26	完存	—	—		片岩系か。台形
95	叩石	大下F	8.4	7.5	7	0.73	完存	—	—		片岩系か。三角形
96	叩石	大下F	7	6.3	3.3	0.21	約2分の1	—	—		玄武岩。円形
97	叩石	大下F	5.9	4.9	4.8	0.22	完存	—	—		片岩系か。三角形
98	叩石	大下F?	6.6	5.5	4.6	0.25	完存	—	—		花崗岩。円形
99	叩石	大下F?	5.8	5.1	4	0.18	完存	—	—		玄武岩。円形
100	叩石	大下F?	4.2	6.3	5.3	0.72	完存	—	—		玄武岩。棒状
101	叩石	大下C	8	6.7	3.6	0.27	約2分の1	—	—		流紋岩系。楕円形
102	叩石	大下C	7.1	6.8	4.1	0.33	完存	—	—		流紋岩系。円形
103	叩石	大下C	8.2	7.2	3.2	0.33	約2分の1	—	—		流紋岩系。円形
104	叩石	大下C	7	6	2.6	0.21	約2分の1	—	—		片岩系か。円形
105	叩石	大下C	6.4	5.7	4.9	0.32	完存	—	—		片岩系か。台形
106	叩石	大下C	6.3	6.2	5.2	0.32	完存	—	—		片岩系か。円形
107	叩石	大下C	7.6	6.5	5.5	0.48	完存	—	—		片岩系か。円形
108	叩石	大下C	7.8	6.5	5.7	0.48	完存	—	—		片岩系か。円形
109	叩石	大下C	6.7	6.5	3.7	0.28	完存	—	—		片岩系か。円形
110	叩石	大下C	6.3	6.2	4.9	0.33	完存	—	—		片岩系か。台形
111	叩石	大下C	6	4.6	3.3	0.14	完存	—	—		玄武岩。楕円形
112	叩石	大下C	9.7	5.2	3	0.22	完存	—	—		玄武岩。楕円形
113	叩石	大下C	10.4	9.2	4.3	0.65	完存	—	—		玄武岩。円形
114	叩石	大下C	7	6.5	6.3	0.52	完存	—	—		片岩系か。円形
115	叩石	大下C	6.7	6.4	2.8	0.21	完存	—	—		片岩系か。円形
116	叩石	大下C	7.8	7.5	4.3	0.36	完存	—	—		片岩系か。円形
117	叩石	大下C	5.7	5.3	3.4	0.15	完存	—	—		片岩系か。円形
118	叩石	大下C	6.6	6.3	5.5	0.37	完存	—	—		片岩系か。円形
119	叩石	大下D	6.9	6.4	3.4	0.23	完存	—	—		片岩系か。楕円形
120	叩石	大下D	7	6.6	5.7	0.39	完存	—	—		片岩系か。台形
121	叩石	大下D	7	5.3	4.5	0.23	完存	—	—		片岩系か。三角形
122	叩石	大下D	7.1	6.5	4.5	0.32	完存	—	—		片岩系か。台形
123	叩石	大下D	8	6.3	4	0.3	完存	—	—		片岩系か。三角形
124	叩石	大下D	5.7	5.4	2.9	0.14	完存	—	—		片岩系か。円形
125	叩石	大下D	6.1	4.8	3.3	0.13	約2分の1	—	—		片岩系か。円形
126	叩石	大下D	8	7.8	3.9	0.4	完存	—	—		片岩系か。円形
127	叩石	大下D	7.8	7.1	4.8	0.4	完存	—	—		片岩系か。円形
128	叩石	大下D	9.1	6.4	4.8	0.5	完存	—	—		片岩系か。長方形
129	叩石	大下E	7.1	6.6	5.7	0.46	完存	—	—		片岩系か。円形
130	叩石	大下E	7.1	6.9	5	0.35	完存	—	—		片岩系か。円形
131	叩石	大下FC	8.3	5.4	4.5	0.28	完存	—	—		片岩系か。三角形
132	叩石	大下FD?	9.7	8.3	7.8	0.98	完存	—	—		5図-17 玄武岩。円形
133	叩石	大下FCD	5.7	5.1	4.8	0.23	完存	—	—		片岩系か。円形
134	叩石	大下FCD?	4.7	6.4	5.4	0.28	約2分の1	—	—		片岩系か。三角形
135	叩石	大下FCD?	7.8	5.3	4.1	0.24	完存	—	—		流紋岩系。楕円形
136	叩石	大下FCD?	7.3	5.8	4.7	0.22	完存	—	—		流紋岩系。楕円形
137	叩石	大下FCD?	6.1	6.2	3.9	0.27	完存	—	—		片岩系か。円形
138	叩石	大下FCD?	5.7	6	4.3	0.22	完存	—	—		片岩系か。方形

No	遺物名	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
139	叩石	大下FFCD?	5.1	5.3	5	0.25	完存	—	—		片岩系か。台形
140	叩石	大下FFCD?	7.2	7.3	3.8	0.34	完存	—	—		玄武岩。三角形
141	叩石	大下FFCD?	4.6	6.1	4.8	0.26	約2分の1	—	—		片岩系か。三角形
142	叩石	大下FFCD?	9.7	6.6	6.3	0.64	完存	—	—		片岩系か。方形
143	叩石	大下FFCD?	8.2	6.1	5.2	0.35	完存	—	—		玄武岩。三角形
144	叩石	SH	6.7	4.6	5.4	0.25	完存	—	—		片岩系か。台形
145	叩石	SH	5.7	8	6.9	0.42	完存	—	—		玄武岩。台形
146	叩石	SH	6.1	7.1	6.8	0.61	完存	—	—		片岩系か。円形
147	叩石	SH	6.1	6.9	3.3	0.2	完存	—	—		片岩系か。梢円形
148	叩石	SH	5.9	6.7	4.7	0.3	完存	—	—		流紋岩系。不正円形
149	叩石	SH	5.2	5.8	3.5	0.22	完存	—	—		流紋岩系。方形
150	叩石	SH	5.8	8.1	3	0.22	厚さ2分の1	—	—		流紋岩系。梢円形
151	叩石	SH	6.3	6.6	5.3	0.38	厚さ2分の1	—	—		流紋岩系。円形
152	叩石	SH	6.7	6.4	6.3	0.39	完存	—	—		玄武岩。円形
153	叩石	MK	8.5	7.1	3.7	0.36	約2分の1	—	—		玄武岩。棒状
154	叩石	YK	6	5.7	6.8	0.37	完存	—	—		片岩系か。円形。 ※「60.11.7 与吉山烟」 の記載有り
155	叩石	KO	8.8	6.6	4.4	0.36	完存	—	—		玄武岩。梢円形
156	叩石	KO	8.2	6.3	5.3	0.49	完存	—	—		玄武岩。台形
157	叩石	KO	6.9	5.6	5	0.3	完存	—	—		玄武岩。円形
158	叩石	HA	8.3	5.7	5	0.34	完存	—	—		片岩系か。三角形
159	叩石	不明	8.6	8.1	3.7	0.42	約2分の1	—	—		玄武岩。台形。全面に 敲打痕有り
160	叩石	不明	9.2	5.6	4.7	0.4	完存	—	—		片岩系の石か。梢円形
161	叩石	不明	7	6.4	3.4	0.22	完存	—	—		片岩系の石か? 三角形
162	叩石	不明	6.6	5.8	4.1	0.29	完存	—	—		片岩系の石か。円形
163	叩石	不明	6.6	6	4.6	0.35	完存	—	—		片岩系の石か。円形
164	叩石	不明	8	6	5	0.35	完存	—	—		玄武岩。台形
165	叩石	不明	7.5	6.3	5	0.38	完存	—	—		片岩系の石か。円形
166	叩石	不明	8	7	3.6	0.34	完存	—	—		片岩系か。円形
167	叩石	不明	6.5	6.1	3.9	0.24	完存	—	—		片岩系か。円形
168	叩石	不明	13.8	9.8	7.9	1.06	完存	—	—		玄武岩。不正円形。大 型叩石
169	叩石	不明	8	7.2	4.5	0.45	完存	—	—		片岩系か。台形
170	叩石	不明	7.7	6.1	4.8	0.39	完存	—	—		片岩系か。三角形
171	叩石	不明	6	5.5	3.1	0.14	完存	—	—		片岩系か。円形
172	叩石	不明	6.8	6	3.8	0.22	完存	—	—		片岩系か。台形
173	叩石?	不明	9.5	7.5	5.9	0.72	約2分の1	—	—		玄武岩。梢円形
174	叩石	不明	10.2	8.5	4.8	0.63	完存	—	—		片岩系の石か。三角形 でやや大型

表5 採集資料一覧 3 (打製石斧)

No	遺物名	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
1	打製石斧	大下F	14.4	7.3	3.7	0.49	体部～刃部	II	—	4図-11	体部がくびれる。縄文 の打製石斧状。小型
2	打製石斧	YK	10.3	6.2	2.6	0.25	ほぼ完存	II	—		
3	打製石斧	不明	9.7	6.1	2.6	0.21	完存	II	—		

※表の備考に石材の記載がない石器は玄武岩製

表6 採集資料一覧 4 (石包丁)

No	遺物名	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
1	石包丁	大下F	9.5	5.4	2.5	0.18	完存	II	—		玄武岩
2	石包丁?	大下F	9	4.3	1.7	0.12	完存	II	—		玄武岩
3	石包丁?	大下F?	12.8	6.4	2.3	0.27	約4分の3	II	—		玄武岩
4	石包丁	不明	10.3	6.1	2.6	0.22	約3分の2	II	—		玄武岩
5	石包丁	不明	10	5.8	2.8	0.22	完存	III	—		玄武岩
6	石包丁?	不明	7.8	10.2	1.8	0.22	完存	III	○	4図-12	滑石系の円盤を原石と する
7	石包丁?	不明	11.8	7.7	2.4	0.25	約3分の2	II	—		玄武岩
8	石包丁	不明	15.5	9.3	4.2	0.84	完存	II	—		玄武岩

表7

採集資料一覧 5 (石鎌)

No	遺物名	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
1	石鎌	宮下広場	6.4	13.1	2.1	0.25	先端から約3分の2	II	—	4図-13	玄武岩
2	石鎌	大下F	9.8	6.4	2.1	0.2	先端から約2分の1	II	—		玄武岩
3	石鎌?	大下F	16.6	5.7	3	0.43	ほぼ完存	II	—		玄武岩
4	石鎌	不明	17.2	8	3.7	0.72	先端部～4分の3	II	—		
5	石鎌?	不明	7	8.2	3	0.29	先端部	II	—		玄武岩
6	石鎌?	不明	8.2	6.3	2.8	0.2	先端部	II	—		石包丁の可能性もあり。 玄武岩
7	石鎌?	不明	15	7	3.6	0.46	完存	II	—		
8	石鎌	不明	9.6	6.2	2.8	0.22	先端部	II	—		玄武岩

採集資料一覧 6 (石錐)

表8

No	遺物名	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
1	石錐	大下F	6	7	2.3	0.16	完存	—	—	5図-14	玄武岩。円錐
2	石錐?	大下F	7.1	5.7	4.6	0.25	約3分の1	—	—		滑石
3	石錐?	不明	13.3	10.1	7	1.3	完存	—	—		滑石
4	石錐?	不明	13.3	10.5	4	0.83	完存	—	—		滑石

採集資料一覧 7 (石戈・石剣)

表9

No	遺物名	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
1	石戈?	大下C	14.3	10.1	4.2	0.57	約2分の1	II	—	5図-15	玄武岩
2	石戈?	大下F	13.2	10.8	4.7	0.7	約2分の1	II	—		玄武岩
3	石剣?	大下F	9.1	4.3	1.6	0.1	約2分の1	II	—	5図-16	玄武岩

採集資料一覧 8 (砥石)

表10

No	遺物名	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
1	砥石	大下FCD?	8	2.1	2.7	0.07	破片	—	—		頁岩系。中砥
2	砥石?	HA	6.5	3.2	1.6	0.06	完存	—	—		砂岩?

採集資料一覧 9 (その他)

表11

No	遺物名	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	遺存部	段階	自然面	挿図	備考
1	瓦片	SH	7.5	7.3	2.1	0.1	—	—	—		
2	土器片	SH	6.2	7.9	1.2	0.08	口縁部片	—	—		須玖
3	土器片	SH	4.1	7.1	2.3	0.06	底部片	—	—		弥生
4	土器片	KO	7.7	8.3	0.7	0.6	体部片	—	—		弥生
5	土器片	不明	9.3	6.1	1.1	0.07	体部片	—	—		内面ハケ目、外面ハケ目・ケズリ調整。古墳か
6	土器片	不明	4	3.5	1	0.02	小破片	—	—		土師器片
7	作業台?	不明	20	17	5.8	2.52	約2分の1	—	—		流紋岩系の石か。長方形
8	剥片?	不明	12.3	6.5	3.2	0.32	完存	II	—		石斧製作中のチップか
9	剥片?	不明	11.8	4	2.4	0.11	—	—	—		石斧製作時の剥片か
10	不明	大下F	19.9	10.2	7.4	1.38	途中で折れ	—	—	5図-19	滑石
11	不明	YK	11	5	1.7	0.13	完存	—	—		滑石。※「60.11.7 山烟 与吉」の注記有り
12	不明	不明	11	9	5.5	0.82	体部	II	—		薄形の石斧か
13	不明	不明	10.5	6.3	4.7	0.48	完存	—	—		片岩系の石か。敲打痕なし。叩石の素材か
14	不明	不明	24.3	6.5	1.5	0.41	完存	I	—		
15	不明	不明	8.3	5	2.4	0.16	完存	—	—		

※表の備考に石材の記載がない石器は玄武岩製

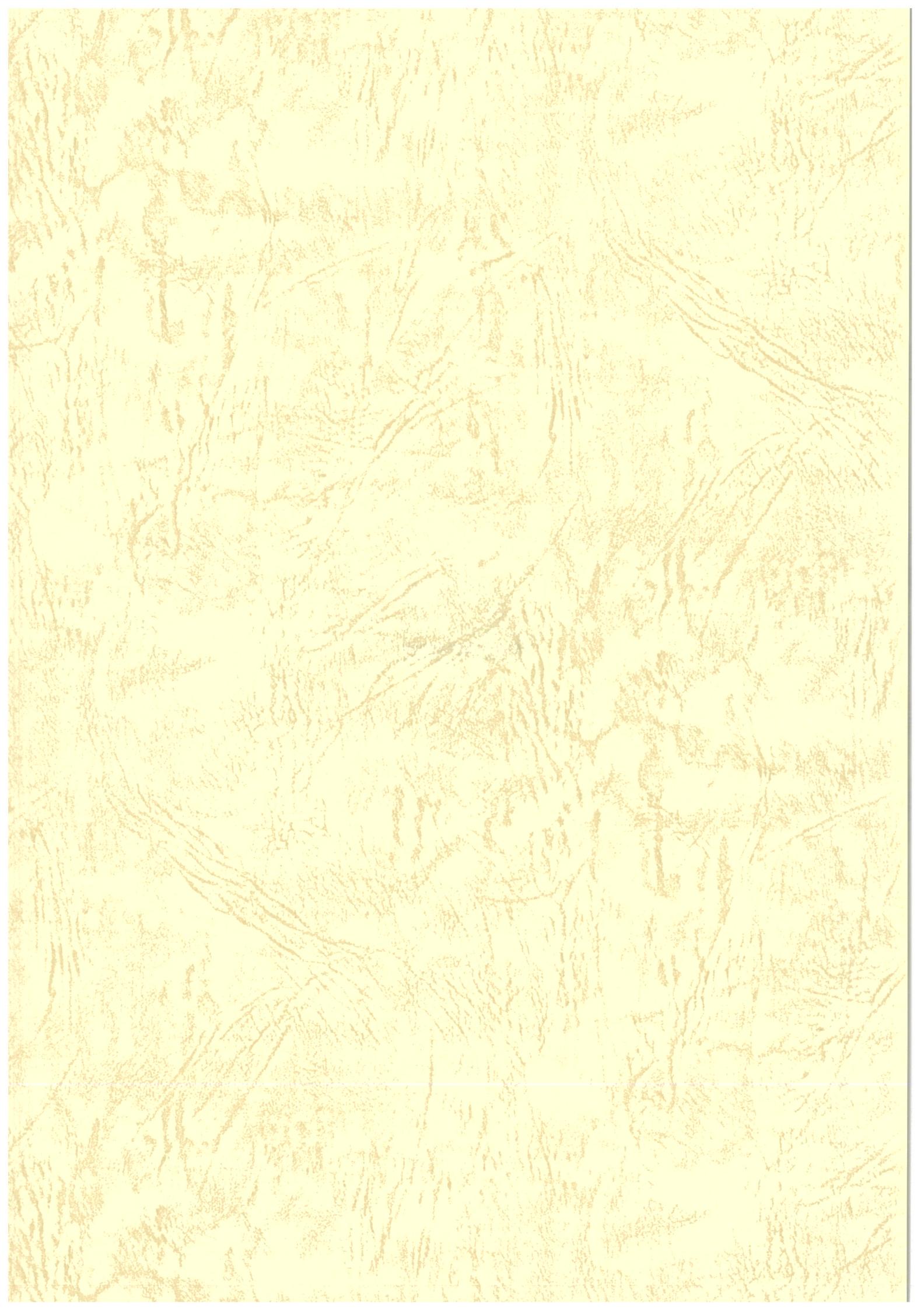
伊都国歴史博物館 紀要一覧

号 (発刊年)	執筆者・内容	備考
創刊号 (2006年)	平尾和久「生産と流通からみた伊都国と奴国」 角 浩行「三雲・井原弥生集落の成立と変遷」	残部僅
第2号 (2007年)	平尾和久「破碎鏡と破鏡の時期的変遷とその認識」 江野道和「国内出土の蝙蝠座鉢内花文鏡についての一考察 －福岡県前原市潤地頭給遺跡出土鏡を中心として－」 岡部裕俊「泊一区出土獸帶鏡について」	300円
第3号 (2008年)	平尾和久「紡錘車の編年とその画期－北部九州出土資料を中心に－」 江野道和「原始・古代船の推進具(上)－研究史から考古資料の分類まで－」 岡部裕俊「ガラス玉副葬の小型甕棺墓－本田孝田遺跡」	300円
第4号 (2009年)	檜崎直子「筑前国志麻郡における律令期祭祀と卜部の関係 －元岡・桑原遺跡群第20次調査から－」 江野道和「原始・古代船の推進具(中) －縄文時代から古墳時代を中心とした推進具集成－」 岡部裕俊「古代の糸島地方と鉄－弥生～奈良時代を中心に－」	300円
第5号 (2010年)	江野道和「原始・古代船の推進具(下)－縄文～古墳時代の推進具集成－」 岡部裕俊「長野川下流域の弥生～古墳時代の遺跡と遺物 －東地区周辺の遺跡と博物館収蔵資料から－」	300円
第6号 (2011年)	岡部裕俊・大澤正己「神在横畠遺跡の製鉄関連遺構と遺物」 古川秀幸「第六三四海軍航空隊玄界基地の遺品」 古川秀幸「糸島の卜占神事1～白糸寒禊ぎにみる米占い～」	300円

糸島市立 伊都国歴史博物館紀要

第7号

発行日 平成24年3月31日
 発 行 糸島市立伊都国歴史博物館
 〒819-1582
 福岡県糸島市井原916
 印 刷 株式会社重富印刷
 〒819-1119
 福岡県糸島市前原東3丁目1番8号
 TEL(092)322-0191





伊都国历史博物馆

ITOKOKU HISTORY MUSEUM